

第4回 家族についての全国調査
(NFRJ18)
第一次報告書

2023年8月

日本家族社会学会 全国家族調査委員会

目次

I	調査のねらいとデザイン	1
1	第4回全国家族調査（NFRJ18）の概要	2
1.1	全国家族調査とは	2
1.2	調査実施に至る経緯	2
1.3	第4回調査の特徴	4
1.4	NFRJ18 からみる全国家族調査の課題	5
1.5	NFRJ18 関連の研究費	6
2	調査票の構造	8
2.1	NFRJ18 調査票の経緯と基本方針	8
2.2	NFRJ18 調査項目の個別的な説明	11
2.3	質的調査との接合	14
3	サンプリングとデータの基本特性	20
3.1	サンプリング	20
3.2	調査実施	23
3.3	回収状況	23
3.4	第1～3回調査との特筆すべき相違点	25
4	データクリーニングの概況	26
4.1	クリーニング方法	26
4.2	クリーニング結果	27
II	調査結果の概要	30
1	学歴、就業、婚姻などの基本属性	32
2	さまざまな意識	38
3	子どもとの関係	50
4	家事頻度・生活意識	57
5	父母との関係	64

I 調査のねらいとデザイン

1 第4回全国家族調査（NFRJ18）の概要

1.1 全国家族調査とは

全国家族調査（NFRJ）は、日本家族社会学会全国家族調査委員会（NFRJ委員会）を調査主体とする、日本における全国規模の家族調査である。1998年（略称NFRJ98、調査実施は1999年）に第1回が実施され、今回の調査（NFRJ18、2018年にサンプリング、2019年初めに実査）が第4回となる⁽¹⁾。NFRJ98のプロジェクトが始動したのは1990年代半ばであったので、全国家族調査の歴史はすでに四半世紀にわたる⁽²⁾。

全国家族調査のプロジェクトが発足した時点において、家族研究者が利用可能な全国規模の無作為抽出標本に基づく大規模個票データはほとんど存在しなかった。これを踏まえ、全国家族調査プロジェクトは、現代日本家族の構造と動態を定量的に観察可能とするための公共利用データを構築するために、5年間隔で反復的横断調査を実施することを目指した（稲葉 2010）。その意図通り、第1回から第3回（NFRJ08、調査実施は2009年）までのNFRJは5年間隔で実施された。NFRJの成果はプロジェクトのメンバーによる多くの論文や複数の書籍として刊行されてきただけでなく、公共利用データとして多くの研究に用いられ、わが国における定量的な家族研究の活性化に大きく寄与してきたところである（Tabuchi 2021）。

第4回調査は、第3回から10年が経過した2018年（調査実施は2019年）に行われることになった。第3回までの調査で、20世紀から21世紀初頭にかけての日本の家族を定点観測するために用いる基礎的なデータは蓄積された。また、上記の研究成果などを通じて、2000年代末までの現代日本家族の構造と動態は一定程度明らかにされてきている。だが、現代日本家族は、世界および日本社会の構造的変動を背景にしながら、その後も変化し続けていることは言うまでもない。2000年代から2010年代にかけて、日本の家族はどのような面でどのように変化したのか（あるいは、しなかったのか）。この問いを明らかにするために、第4回調査は、過去3回の調査データとの比較を可能にするかたちで継承しつつ、かつ、過去3回の調査では十分に明らかにされてこなかった現代日本家族の側面を新たに探究することも目指す調査として企画された。

1.2 調査実施に至る経緯

NFRJ08以降に行われたNFRJ委員会のメンバーによる研究成果取りまとめの過程において、第4回全国家族調査は2018年（2019年実査）の実施を目指し、研究プロジェクトを立ち上げ、調査のための研究費取得を目指すことが合意された。プロジェクトは、NFRJ委員会と緊密な連携を取りながら、調査の計画・実施から成果取りまとめまでを実行委員会が担うこととした（最終的に「NFRJ18研究会」の名称を採用）。NFRJ18研究会は、主要メンバーが構成する「幹事会」と一般の研究会メンバーによって構成される。幹事会はプロジェクトの統括、研究会組織の管理と連携、調査実施の管理を担い、研究費取得の申請メンバーを

兼ねる。一般の研究会メンバーは調査実施が具体化した後に日本家族社会学会会員から公募するものとした。幹事会のメンバーは保田時男（関西大学；副代表）、田中慶子（慶應義塾大学；事務局）、松田茂樹（中京大学）、西村純子（お茶の水女子大学）、佐々木尚之（大阪商業大学）、筒井淳也（立命館大学）、稲葉昭英（慶應義塾大学）、吉田崇（静岡大学）、および田淵六郎（上智大学；代表）である（所属は2021年4月時点）。また、NFRJ委員会との連携および関連する派生調査との連携を意図して、幹事会メンバーに木戸功（聖心女子大学）、永井暁子（日本女子大学）、西野理子（東洋大学）、松木洋人（大阪市立大学）を加えた「代表連絡会」を組織している。

2015年頃から進められた上記プロジェクトにおける検討の中で、第3回までの調査との比較可能性を担保するためには調査方法（全国の男女を対象とする訪問留置法による調査）の大きな変更は難しいという判断に至った。過去の調査の計画標本規模（9000から10000程度）と同等の規模で調査を実施するためには大規模な予算を必要とするため、2016年度の科学研究費申請において基盤研究(S)で申請を行ったが、残念ながら採択には至らなかった。2018年度中の調査実施は最優先事項であったため、次の年度の科学研究費申請では計画標本規模と予算規模を縮小した申請に切り替えることとし、幸い、2017年度～2021年度科学研究費（基盤研究(A)「大規模継続家族調査による家族形成期の困難に関する実証的解明」）が採択されることとなった。

科学研究費採択を受けて、2017年5月の日本家族社会学会ニューズレターなどを通じて、学会員を対象として研究会参加メンバーを公募した。上記代表連絡会メンバーを除く研究会メンバーは、若干の変動を経ているが、2021年度4月時点で56名に達している。

NFRJ18研究会による調査実施準備過程において、幹事会のもとに「レビュー班」「調査設計班」「モジュール班」という3つの研究班が組織された（以下、カッコ内は担当の幹事会メンバー）。それぞれの班の主たる役割は以下の通りである。「レビュー班」（松田・西村・佐々木）：NFRJに関わる先行研究と調査課題の整理、分析技法の検討、分析報告書の作成、国際発信の検討。「調査設計班」（保田・筒井）：サンプリングの検討、調査票作成、データ整備・管理。モジュール班（稲葉・吉田）：調査項目のモジュール化（既存の調査項目を分類し標準的な調査項目群を整理することを指す）、調査報告書作成、派生調査との連携。

2017年度4月より、調査実施に向けた研究活動が本格的に始動した。レビュー班では、研究会メンバーを研究課題別に複数のグループに分け、国際的水準での研究成果の発信を見据えた調査デザインを目指して、国際的な研究動向と最新のデータ分析技法に配慮しつつ、先行研究と問題の整理を行った。2017年9月には日本家族社会学会大会において研究者間の研究討論を進め、その後研究メンバーによる複数回の研究会を開催し、調査実施に向けた論点の検討が行われた。モジュール班では、過去3回の蓄積があるNFRJ調査項目のモジュール化が進められた。調査設計班では、サンプル設計と調査法を中心に実査の様々な可能性を検討した。具体的には、特定の年齢層を除外した設計、年齢層によってデータ収集法が異なる設計、郵送法と留め置き法の比較などが検討された。こうした検討を踏まえ、サン

ブル設計の検討資料とするためのプリテストが 2018 年 2 月から 3 月にかけて実施された。

これらの結果を踏まえ、2018 年 8 月に研究会メンバーによる項目検討のための全体研究会を開催し、調査設計班の担当で最終的な調査票の作成が進められた。9 月から 10 月にかけて、完成した調査票をもとに、上智大学『人を対象とする研究』に関する倫理委員会に倫理審査の申請を行い、承認された。10～11 月にかけて全国の調査対象地区の抽出ならびに各地区での住民基本台帳からの標本抽出（層化 2 段無作為抽出による。第 2 次抽出単位は 2018 年 12 月末日時点で 28 歳から 72 歳の男女）を行い、2019 年 1 月から 3 月にかけて訪問留置法（不在者については郵送法により 4 月末まで継続）調査が実施された。調査の実務は中央調査社によって行われた。研究費の予算制約（間接経費分の減額を含む）のため、計画標本規模は 5,500 となった。4 月までに 3,044 名の標本が回収された。納品されたデータのクリーニングは 2019 年 9 月にかけて調査設計班の保田氏を主担当に実施され、最終的な有効回収数は 3033 票（有効回収率 55.15%）となった。クリーニング後の個票データは研究会メンバーで共有され、レビュー班の構成の際に分けられた研究グループ別にデータの分析が取り組まれた。

1.3 第 4 回調査の特徴

上記の通り、NFRJ18 は過去 3 回の NFRJ のいわば「発展的継承」を目指したものである。まず「継承」としては、過去の NFRJ との比較可能性を重視し、調査対象者たる個人からみた家族関係に関する詳細かつ総合的な既存調査項目を可能な限り踏襲することを配慮した。NFRJ の重要な強みの一つは、調査対象者の配偶者・親・義親・子・きょうだいといった、世代およびジェンダー間のつながりで特徴付けられるネットワーク構造を持つ複合的關係を広く同時に調査しており、他の調査研究では十分に明らかにならない家族構造的な視点を提供している点である。NFRJ18 でもこうした特徴を維持することを目指した。関連して、調査票を若年者用、壮年者用、高年者用の 3 つに区分し、各ライフステージに特徴的な項目を含むようにした点も、NFRJ08 から踏襲した点である。

同時に、NFRJ18 においては、前回調査以降の家族を取り巻く社会的状況に対応するための「発展」として、「家族形成期の困難」に照準を当てた点に主要な特徴がある。「家族形成期の困難」とは、未婚化、少子化、仕事と家族のバランスの困難、育児負担の問題、若年者の格差と貧困の問題、ひとり親世帯の貧困の問題、高齢者介護、世代間格差など、近年の家族に関連する社会的課題に共通する傾向を要約的に捉えた概念である。過去の NFRJ でもこうした課題が看過されていたわけではないが、前回調査以後の日本社会の変動は、こうした「困難」を加速させていると考えられる。NFRJ18 では、こうした課題把握のもとに、「家族形成期の困難」の実態を過去の調査よりも更に詳細に把握できるように NFRJ の調査設計を改善し、その原因と対策の究明に資することを目指した。具体的な調査項目としては、家族形成期のライフコース経験のダイナミクスを捉えるために、パネル調査に代わる工夫として回顧的な調査項目を導入し、家族形成期の困難や家族関係の重要な変化を測定するこ

となった（調査設計班の保田氏を中心に検討された）。

なお、上記の意味での発展とは別に、NFRJ18では調査項目の「モジュール化」を積極的に進めることによって、他の家族研究者がNFRJからの派生調査を実施しやすい環境を整え、NFRJの成果の社会的還元を促進することを意図した点も特徴的である。具体的には、NFRJ委員会との連携のもと、日本家族社会学会のメンバーによる他の研究グループによって、NFRJ18のモジュールを用いた「質的調査」が実施されている。

「家族形成期の困難」を適切に捉えるためには、調査票設計のみならず、サンプル設計（若い年齢層のオーバーサンプリングなど）における新しい試みを行う可能性もあった。研究費取得前にはこうした点も検討がなされていたが、予算制約により計画標本規模の大幅な縮小を余儀なくされたことも踏まえ、様々な議論を経て、対象者の年齢幅は前回調査と同じ28歳から72歳となった。結果として、過去のNFRJに比べて分析における標本誤差が大きくなるという状況が生じやすくなっていることには注意が必要である。とはいえ、「社会調査の困難」が指摘される近年の厳しい社会状況のもとで、NFRJ08とほぼ同じ回収率が得られたのは幸いであった。調査にご協力くださった回答者の方々には、この場をお借りして心からの御礼を申しあげたい。NFRJ18の狙いとした成果が十分に挙げられたかどうかは、本報告書を含め、今後NFRJ18データを用いた論文や書籍などを通じて明らかにされるものであるが、そうした成果を通じて少しでも現代家族の抱える困難が軽減されるよう、引きつづき努力を続けたいと考える。

1.4 NFRJ18からみる全国家族調査の課題

NFRJ08の研究代表者であった稲葉氏は、NFRJ08の実施における課題として、実行委員の抱える負担の問題と、研究費獲得の困難という問題を指摘されている（稲葉 2010）。ほぼ同じ問題は、NFRJ18においても当てはまると考えられる。

後者の研究費に関して言えば、標本規模を確保するために予算のほとんどを調査委託費に充てることとなったが、それでも大幅なサンプルサイズの減少を余儀なくされた。これは大規模な研究費が得られなかったことの結果でもあり、十分な予算を確保することができなかった責を負う代表として反省するところは大きい。研究費獲得に向けて最も重要であるのは、NFRJ18の研究成果の発信を通じてNFRJのプレゼンスを高めることであることは言うまでもないが、今後検討の余地があるだろう別の論点として、調査デザインの再検討を挙げておきたい。とくに、調査票のモジュール化を更に進め、特定のモジュールについて郵送法（あるいは、調査方法論の面で困難であろうが、インターネット調査）を採用（併用）するなどのかたちで、1票当たりの回収コストを下げることは可能である。こうした検討を通じて、今回の規模の予算であっても相対的に大きなサンプルサイズが確保できる方法を探ることは、重要な課題であろう。

委員の負担の問題については、今回の予算規模では実務を補佐する専従職員を雇用することは不可能であったため、過去と同様に委員や研究会メンバーのボランタリーな貢献に

大きく依存することとなった点は、強く反省されるべきである。多忙ななかで多くの貴重な時間を割いて本プロジェクトに貢献してくださっている幹事会メンバーの方々、とくに保田氏と田中氏にはこの場を借りて心より御礼申しあげたい。研究会メンバーには相当数の若手研究者の参加を得ているとはいえ、幹事会のメンバーは全員が前回調査から関わるメンバーである。次のNFRJが可能になるには、世代更新が不可避である。若手研究者の環境の悪化や大学研究者の多忙化が進むなかで、研究者のボランティアな関与に大きく依存した実行委員会（研究会）形式で、これまでと同様なかたちで学会としての調査プロジェクトを運営していくことは、今後さらに困難になることが見こまれる。こうした困難をどのように克服していくことができるか、学会などでの議論を通じた検討が深まることを期待したい。

1.5 NFRJ18 関連の研究費

NFRJ18 実施にあたり、以下の研究助成を得た。記して謝意を表したい。

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「大規模継続家族調査による家族形成期の困難に関する実証的解明」（課題番号 17H01006）

研究代表者：田淵六郎（上智大学総合人間科学部教授）

配分額：

2017 年度: 2,730 千円 (直接経費: 2,100 千円、間接経費: 630 千円)

2018 年度: 34,060 千円 (直接経費: 26,200 千円、間接経費: 7,860 千円)

2019 年度: 1,300 千円 (直接経費: 1,000 千円、間接経費: 300 千円)

2020 年度: 650 千円 (直接経費: 500 千円、間接経費: 150 千円)

2021 年度: 1,560 千円 (直接経費: 1,200 千円、間接経費: 360 千円)

合計：40,300 千円 (直接経費: 31,000 千円、間接経費: 9,300 千円)

注

(1)いわば「定点観測」調査として実施されてきたNFRJの他に、以下の関連する調査が実施されている。女性のみを対象とした「戦後日本の家族の歩み」調査（NFRJ-S01、2002年に実査）；NFRJ08の回答者を対象としたパネル調査「家族についての全国調査：2009フォローアップ」（NFRJ08-Panel、2009年～2013年に実査）；回顧調査「青年期から成人期の振り返り調査」（NFRJ-16R、2017年に実査）。

(2)全国家族調査ホームページを参照。https://nfrj.org/nfrj_profile.htm

引用文献

稲葉昭英, 2010, 『第3回家族についての全国調査(NFRJ08)』の意義と課題」日本家族社会学会全国家族調査委員会編『第3回家族についての全国調査(NFRJ08) 第一次報告書』7-12.

Tabuchi, Rokuro. (2021). Family sociology in Japan: Recent developments and the current state of the field. *International Sociology*, 36(2), 231-242.

(田淵六郎)

2 調査票の構造

2.1 NFRJ18 調査票の経緯と基本方針

NFRJ18 の調査票作成にあたっては、前3回の調査との連続性に留意しつつ、前回調査から10年を経た研究状況の変化に対応するため、多くの点で既存項目の見直しおよび新規項目の導入を積極的に行った。そのため、2回の郵送予備調査をはじめとして調査項目の調整はかなり慎重に進められた。

具体的には以下のような7段階の手続きを経た。より詳しい経過は、表2.1のとおりである。

- 1) レビュー班を中心に、新規項目提案のとりまとめ
- 2) 第1回全体研究会での検討し、提案をリバイズ
- 3) 調査設計班を中心に、提案項目の選別や修正要求して調査票案を作成
- 4) 予備調査①（A市郵送調査）実施
- 5) 予備調査①の結果をふまえた調査票案の改訂（項目の取捨選択や微調整）
- 6) 予備調査②（モニター郵送調査）実施
- 7) 予備調査②の結果をふまえた調査票案の改訂（微調整）

表 2.1 NFRJ18 の調査票作成の経過

年月日	事項
2017年7月22日	NFRJ18 研究会幹事会 →レビュー班・モジュール班・調査設計班体制の確定
2017年9月10日	第27回学会大会 NFRJ18 研究会のキックオフミーティング
2017年11月6日	レビュー班の提案の提出締切
2017年11月12日	第1回全体研究会 3つの班に分かれてレビュー班提案の検討
2017年12月27日	研究会での検討をふまえてレビュー班提案のリバイズ
2018年1月8日	レビュー班提案を組み込んだ予備調査用の調査票を調査設計班で作成
2018年2月	予備調査①実施（A市で郵送）「多様な家族に関するアンケート」
2018年4月23日	モジュール班による既存調査項目の検討が調査設計班に届く
2018年7月15日	予備調査①の結果が調査設計班に届く
2018年8月29日	第2回全体研究会 モジュール班報告、予備調査①後の調査票案の説明
2018年9月8日	第28回学会大会 調査準備の進捗を学会員に報告
2018年9月15日	研究会と学会大会を踏まえた調査票改訂案をメールで共有
2018年11月	予備調査②実施（調査会社のモニター登録者に郵送調査）
2018年12月9日	最終調査票案を研究会で共有、最終確認
2019年1月8日	完成調査票を研究会で共有
2019年1月	実査

まずレビュー班を中心として新規項目提案の取りまとめを行ったが、この際には各提案者が1~2ページ程度の提案書を作成し、具体的な調査項目の案だけでなく先行研究を踏まえたねらいの説明を文書化した。全30件の提案は内容で3班に分類し、全体研究会やレビュー班内での再検討が行われた。この提案群がNFRJの枠組みで可能かどうかを調査設計班で検討し、必要な修正は提案者に依頼したうえで、可能な限り調査票案に組み込まれた。調査票案の中から再検討が不要な既存項目をある程度省き予備調査①(A市郵送調査)が行われた(永井ほか2019)。この調査では調査票回答後の質的調査(インタビュー調査)への協力の可能性も同時に検討された(後述)。この予備調査をふまえて新規項目の取捨選択や微調整を行い、モジュール班での既存項目の検討も加えて再度、調査設計班で調査票改訂案を作成した。調整にあたってはとくに予備調査での意識項目の分布を確認し、回答が偏りすぎない適切なワーディングになっていることに留意した。調査票改訂案は全体研究会やメール等でさらに検討を行い、調整を加えた項目を中心として予備調査②(モニター郵送調査)で再度分布の確認を行った。この予備調査は調査会社のモニター回答者によるもので厳密な代表性はないものの、ある程度一般的な傾向を反映していると考えられ、また回答の即時性が担保されているので、最終調整のために適切な方法であったと考えている。最終的な微調整を行った調査票が実査に使用された。

NFRJ18の調査票はいくつかの新しい視点を導入しているが、基本的には前3回の調査との連続性を重視しており、共通点が多い。とくに以下の4点については、基本方針として留意した。

(1) 回答者を中心とするダイアド集積型調査の踏襲

NFRJは、回答者本人を中心として、その回答者が所有する親族(配偶者、父、母、子、きょうだい、義理の父、義理の母)のそれぞれについて属性や関係を測定するダイアド集積型調査のデザインを取っている。これは、家族調査においても調査対象の単位はあくまで個人であり、家族は回答者個人が取りうる選択肢の1つという視点を示している。また、子どもやきょうだいについて集合的に質問することをできるだけ避け、一人ひとりの家族成員とのダイアド関係を別々に測定することで、子どもやきょうだいのなかでの比較分析を可能にしている。NFRJ18でもこの方針は踏襲している。

(2) 年齢層別の調査票の踏襲

NFRJ08では、サンプリング時(調査前年の12月31日)の年齢で、調査対象者を若年(28~47歳)、壮年(48~62歳)、高年(63~72歳)の3種類にわけ、それぞれにある程度個別の調査項目を配分するデザインを採用した。NFRJ18ではこのデザインを踏襲している。図2.1のとおり、それぞれの年齢層について、若年者調査票、壮年者調査票、高年者調査票(以下、若年票、壮年票、高年票と略記)を作成したが、大部分は「①全年齢層共通」の調査項目で占められており、②~⑤の調査項目がそれぞれに組み込まれている。3種類の調査票を

作成する手間はかかるものの、調査対象者の視点から自身にそぐわない調査項目を尋ねられることが少なくなり、枝分かれ質問を 1 つの調査票のなかに組み込むのに比べて見たと目の調査票のページ数も少なくすることができる。調査対象者の負担を減らし、自分の生活に関係のある調査として回答のモチベーションを高めることは、ある程度回収率の向上にも貢献していると思われる。ただし、分析の際に 3 つの調査票があることは煩雑なので、NFRJ18 ではデータ作成前に分析時に参照するための「統一調査票」を作成した（後述）。

28～47 歳 若年票	48～62 歳 壮年票	63～72 歳 高年票
①全年齢層共通		
②若年+壮年のみ		⑤高年のみ
④若年のみ	③壮年+高年のみ	

図 2.1 NFRJ18 の 3 つの調査票

(3) 意識項目の連続性の保持

NFRJ18 の調査票検討に当たっては、既存の調査項目のなかでワーディングや測定形式が不統一であったり、不適切であったり（回答が偏りすぎる等）するものがいくつか見つかった。これらを統一・修正する可能性も考えられたが、とくに意識項目においては、わずかなワーディング等の違いが回答傾向に影響することがあるので、NFRJ08 のまま変更しない方針を取った。とくに調査分量を削減する一環として、予備調査においては分量の多いうつ尺度（CES-D）を別尺度で代替することを検討したが、最終的には上記の方針を優先し、変更しないことになった。一方で、事実を測定する調査項目については、回答の誤りが多い項目や回答しにくい項目の修正を比較的積極的に行った（後述）。

(4) 一度限りの調査項目の積極的な導入

NFRJ の大きな目的は、繰り返し横断調査することによって家族を取り巻く大きなトレンドを捉えることにある。したがって、原則的に調査項目は同一のものが継続的に繰り返されることが望ましい。しかしながら一方で、一時的な現象かもしれないが現在の重要な問題に関わる調査項目や、NFRJ の既存項目と関係付けることで有効な研究が可能な調査項目も多く存在する。NFRJ18 では、一度限りとなるであろう調査項目についても少数の調査項目で有効な研究が可能と思われるものは、積極的に導入した。これは NFRJ 発足時に比べて多くの調査データが利用可能になる一方で、代表性のある大規模な調査を独自に実施することのハードルはむしろ高くなっている、と考えられるためである。NFRJ08 までの調査項目は基本的に継続を前提としているが、NFRJ18 で導入した多くの新規項目は継続を前提とはしていないことに留意が必要である。

2.2 NFRJ18 調査項目の個別的な説明

NFRJ18 の調査項目は表 2.2 のようにまとめられる。先述のとおり若年票、壮年票、高年票の 3 種類の調査票があるが、参照の便宜のために「統一調査票」を作成した（統一調査票は実査には使用されていない）。データの質問番号は統一調査票に沿ったものであり、分析報告においても基本的に統一調査票の質問番号を用いることを推奨している。

各調査項目については NFRJ08 での対応する調査項目の有無と NFRJ08 からの変更が右に添えてある。NFRJ08 に存在しない調査項目は「－」で表されており、これが NFRJ18 での新規項目にあたる。一部の調査項目においては、3 種の調査票での有無が NFRJ18 と 08 で異なっていたりワーディング等に修正が施されていたりする。また、NFRJ08 で存在したが NFRJ18 で削減した調査項目はこの一覧表の中には出てこない。

個別の調査項目の追加、変更についての説明は以下のとおりである。

(1) 性・結婚の多様化の把握

NFRJ18 では、多様な性や結婚を把握するために、性自認（問 1-1）、配偶者の性別（問 8-3）を追加した。また、同棲や事実婚の把握のため、婚姻届けを出した時期（問 8-2）を追加した。また、比較的一般的な婚姻のバリエーション（すなわち、離婚や再婚、ステップファミリー）についてもより詳しく捉えられるように変更を施した。離死別者や再婚者にも初婚相手のことを尋ねることにし、その場合に相手の学歴、子どもの有無、初婚かなどを詳しく尋ねている（問 17-1～問 17-7）。また、他にもそれぞれの子どもが実子か（問 25(3)）を尋ね、父母の離婚経験（問 41）、父母が実親か（問 42 ア）、特別な経験の有無（問 52）を尋ねるなど、多様な関係性に留意している。

(2) 健康・介護

健康や介護は重要な問題であるが、当事者である期間は限られ、また介護中の調査協力が得にくいという問題があった。NFRJ18 では過去の介護経験や将来の予測を含めて、ある程度その実態を把握できる調査項目を追加した。実態として、介護が必要な家族、現在介護している家族、自身の過去の介護経験（問 38～問 40-1）を尋ねるとともに、配偶者・父母・きょうだい・義父母を誰が介護すると思うかの予測（問 8-9、問 43 イ、問 45 ク、問 50 イ）を尋ねた。また、父母・きょうだい・義父母の基本的な健康状態（問 43 ア、問 45 キ、問 50 ア）を尋ねる項目を追加した。

(3) 父母・子ども・きょうだい・義父母の生活状況

NFRJ では従来からそれぞれの家族について属性や関係性を尋ねているが、それぞれの基本的な生活状況を把握できる項目が部分的に欠けていたので、これを補った。NFRJ18 では、子どもの年収・婚姻状態（問 27 ウ・エ）、父母の家計の主観的評価（問 43 オ）、きょうだい

の婚姻状態・家計の主観的評価（問 45 オ・カ）、義父母の家計の主観的評価（問 50 オ）を追加した。

（4）生活の各側面の満足度

NFRJ08 では全体的な生活満足度は尋ねられていたが、個別の側面についての満足度は尋ねられていなかったため、生活状況の評価が難しい側面があった。NFRJ18 では 6 つの生活側面についてそれぞれの満足度（問 37）を尋ねるとともに、配偶者の仕事への満足度（問 11 ウ）を追加した。また、客観的収入を補う意味で家計の主観的評価（問 34）を追加した。なお、家計の主観的評価は過去の NFRJ03 で用いられていたワーディングと同一である。

（5）結婚・子育てに関する状況の補填

NFRJ18 は「家族形成期の困難」を科研のテーマとしているので、結婚・子育てに関する状況や評価を把握する調査項目を補填的に追加した。それぞれの子どもについて幼少時の育児の状況として、本人・配偶者の育児休業取得の有無、乳児期の育児経験、2 歳時の保育（問 26 エ・オ・カ）を尋ねている。また、現在の子育ての負担感（問 29）、子育ての悩みを相談する相手（問 30）を尋ねている。その他に、若いころの結婚・出産への周囲からのプレッシャーの有無（問 23）を尋ねている。検討の結果、NFRJ08 の調査項目を代替項目に置き換えたものもある。NFRJ08 では「結婚・出産をきっかけにした仕事の変化」が尋ねられていたが、過去のクリーニングから正確な回答を得られていない可能性が高いため、これを結婚・出産前後の就業を捉える調査項目（問 12）に変更した。また、配偶者についても同じく結婚・出産前後の就業（問 13）が把握できる項目を追加している。

（6）その他の新規項目

NFRJ18 では、新規の項目としてその他に以下のような調査項目を追加した。配偶者との話し合いの程度、夫婦の勢力関係（問 14、15）、現代的な規範意識項目の追加（問 18 コ・サ・シ・ス）、孤独感（問 20）、家事の外部サービスの利用、夫婦以外に家事をしてくれる人（問 32～問 33-1）、きょうだいと同居しているか、きょうだいと親を援助しているか（問 46 ア・イ）、家族以外との交流の程度（問 53）。

（7）その他の細かな変更事項

NFRJ18 では家族について年齢や出生年を尋ねる調査項目のいくつかを、回答者との年齢差で尋ねる形式に置き換えた。（離死別経験者の）初婚配偶者については年齢ではなく回答者との年齢差（問 17-2）を尋ねている。また、父母の死亡は暦年で尋ねる項目を変更し、回答者が何歳のときに死亡したかを尋ねている（問 42 エ）。きょうだいについても、出生年で尋ねる項目を変更し、回答者との年齢差（問 45 イ）で尋ねている。これらは、死亡や離婚等の理由で交流がない人々について年齢を尋ねにくい問題を解決し、また客観的に出生年

等を尋ねるよりも自分の年齢を中心に考えたほうが直感的に答えやすいためである。また、きょうだいについては性別を尋ねる代わりに兄弟姉妹の続柄（問 45 ア）で尋ねる形式に変更した。

NFRJ は子どもの年齢幅が広いとため幼い子どもや成人の子どもが混在しており、対象にそぐわない質問となることがあった。そこで NFRJ18 では子どもが 18 歳以上かどうかを尋ねる枝分かれ質問を設け（問 26 キ）、18 歳以上の場合のみ答えるべき質問項目を切り分けている。

NFRJ では詳しい状況を測定するために、選択肢の数が多い調査項目がいくつかあった。多くの選択肢は広い調査票スペースを占めてしまう。そこで、NFRJ18 では分析にほぼ支障がない一部の調査項目については選択肢を統合して数を減らしている。子どもとの居住距離、父母との居住距離、義父母との居住距離（問 27 ア、問 43 エ、問 50 エ）は 8 択を 6 択にし、きょうだいとの居住距離（問 45 ウ）は 8 択を同別居の 2 択のみにした。世帯員の続柄（問 57）は 19 択を 15 択に統合した。収入の選択肢は本人・配偶者が 15 択で世帯収入が 19 択あったが高額の選択肢を一部統合して 12 択とした。また、NFRJ08 ではばらばらの位置で尋ねていた 3 つの収入は一か所でまとめて世帯収入を一度に考えやすいようにした（問 54）。

逆に選択肢を増やした調査項目も一部ある。子どもの仕事の有無（問 27 イ）は有職を「週 35 時間以上」と「週 35 時間未満」にわけた。また、義父母が結婚後に死亡した場合は死亡の時期（問 49）を追加で尋ねることとした。

本人と配偶者の兄弟姉妹の数について、NFRJ08 ではいない場合「0」と記入してもらった形式であったが記入漏れが多く一人っ子と無回答の判別が厳密には難しい面があった。そこで NFRJ18 ではきょうだいの有無を尋ねる調査項目（問 44、47、8-4、8-5）を独立させた。

きょうだいとの援助関係は NFRJ08 ではそれぞれ個別の調査項目で尋ねていたが、簡便のために複数回答の 1 問にまとめた（問 45 コ・サ）。ある程度回答傾向が変わる可能性が高いが援助関係の発生頻度がそもそも低いためスペースの削減を優先した。また、子ども・父母・義父母との金銭的援助（問 27 キ・コ、問 43 キ・コ、問 50 キ・ケ）の額を具体的に記入させる形式に変更した。

NFRJ18 調査票では NFRJ08 から調査票の視覚的なデザインをやや変更している。従来は選択肢の横並びと縦並びが混在していたが、マトリックス以外は縦並びに統一した。回答しやすいことと調査票のスペース調整が行いやすいためである。スペース的な問題がある場合は縦並びのまま 2 段組にしている。また、「付問 1」という表記を「問〇-1」のように改めた。これは付問が続きすぎて調査票の構造がわかりにくかったためである。

(8) NFRJ08 から削減した調査項目

NFRJ08 から（代替もなく）削減した調査項目は以下のとおりである。NFRJ08 では本人および配偶者がいま仕事に就いていない場合は代わりに「過去の主な仕事」を回答してもら

っていたが、実際的に分析に使用することが難しいため削減した。本人および配偶者の「通勤時間」は分析によっては有用であるが、主にスペースの都合からやむを得ず削減した。「配偶者との会話の頻度」は他に配偶者との関係性を測定する調査項目が豊富なため削減した。配偶者・父母・義父母・子ども・きょうだいが「家族の一員だと思うか」という質問は有用な研究に限られるわりに多くのスペースを必要とするので削減した。「死亡した子ども」の情報はセンシティブなわりに有用性が低いので削減した。「子どもといっしょに夕食をとる頻度」はその意味合いが複合的で扱いにくく、他に子どもとの関係性を測定する調査項目も豊富なため削減した。「世帯主」は現代的には重要な意味を持たないと考えられるので削減した。高年票のみの「初職」は高齢者に限る分析の有用性が低いため削減した。以上のように削減調査項目は限定的で、NFRJ08からの継続性を可能な限り保持するように、NFRJ18の調査票は作成されている。

削減項目よりも新規項目のほうが大幅に多いため、NFRJ18は調査内容が増えているが、レイアウトの工夫でページ数は抑えられており、質的調査への協力意思を尋ねるページ（後述）を除くと、若年・壮年・高年調査票のページ数はそれぞれ22、22、20ページに抑えられている（NFRJ08は各24、24、19ページ）。

2.3 質的調査との接合

NFRJ18では調査票の最後に追加の調査に協力する意思があるかどうかを尋ねている。この質問は、NFRJ18と接合して実施されたNFRJ質的調査への協力意思を尋ねるものである。NFRJ質的調査はNFRJ18の調査対象者の中から個別に質的調査の対象を選別しインタビュー調査や観察調査を依頼するもので、この最後の質問で協力の意思を示した人々の中から改めて協力依頼を行った。この質問への回答分布は「1 追加の調査の依頼があれば、協力を前向きに検討したい」が9.5%、「2 調査の内容によっては協力を検討してもよい」が33.1%、「3 追加の調査に協力するつもりはないので、郵便を送らないでほしい」が51.0%、無回答が6.4%であった。

NFRJ質的調査については、NFRJ18とは別に研究組織（全国家族調査質的調査研究会）を形成し実施された（木戸2021, 木戸ほか2022）。NFRJ18では、無作為抽出による量的調査と質的調査の架橋という新しい試みが行われた。

表 2.2 NFRJ18 の調査項目一覧

NFRJ18 質問番号				質問内容	NFRJ08 からの変更	NFRJ08 での有無		
若年	壮年	高年	統一			若	壮	高
問 1	問 1	問 1	問 1	性別	質問文：文言変更（どちら→いずれ）、文言追加（戸籍登録された性別）	○	○	○
問 1-1	問 1-1	問 1-1	問 1-1	性自認		—	—	—
問 2	問 2	問 2	問 2	生年月・年齢		○	○	○
問 3	問 3	問 3	問 3	最終学歴	高年票からも「旧制学歴」表記消去	○	○	○
問 4	問 4	問 4	問 4	離家の時期	離家経験と時期を 1 問に圧縮。高年票にも追加	○	○	×
問 5	問 5	問 5	問 5	離家の理由	高年票にも追加	○	○	×
問 6	問 6	問 6	問 6	現職の有無	無職者に過去の「主な仕事内容」は尋ねないことに変更	○	○	○
問 6-1	問 6-1	問 6-1	問 6-1	従業上の地位		○	○	○
問 6-2	問 6-2	問 6-2	問 6-2	仕事内容		○	○	○
問 6-3	問 6-3	問 6-3	問 6-3	企業規模		○	○	○
問 6-4	問 6-4	問 6-4	問 6-4	労働日数	高年票にも追加	○	○	×
問 6-5	問 6-5	問 6-5	問 6-5	労働時間	高年票にも追加	○	○	×
問 7	問 7	問 7	問 7	ワークライフバランス	高年票にも追加	○	○	×
問 8	問 8	問 8	問 8	婚姻状態	質問文：文言一部削除	○	○	○
問 8-1	問 8-1	問 8-1	問 8-1	結婚年齢	質問文：文言追加（再婚者は一番最近の結婚を回答）	○	○	○
問 8-2	問 8-2	問 8-2	問 8-2	婚姻届けを出した時期		—	—	—
問 8-3	問 8-3	問 8-3	問 8-3	配偶者の性別		—	—	—
問 8-3	問 8-3	問 8-3	問 8-3	配偶者の生年月・年齢		○	○	○
問 8-4	問 8-4	問 8-4	問 8-4	配偶者の兄弟姉妹（健在）の有無	有無のみを尋ねる項目を独立	—	—	—
問 8-4	問 8-4	問 8-4	問 8-4	配偶者の兄弟姉妹数（健在）	質問形式の変更（健在・死亡を個別に尋ねるように変更）	○	○	○
問 8-5	問 8-5	問 8-5	問 8-5	配偶者の兄弟姉妹（死亡）の有無	有無のみを尋ねる項目を独立	—	—	—
問 8-5	問 8-5	問 8-5	問 8-5	配偶者の兄弟姉妹数（死亡）	質問形式の変更（健在・死亡を個別に尋ねるように変更）	○	○	○
問 8-6	問 8-6	問 8-6	問 8-6	配偶者の離死別経験	質問文：文言一部変更（内縁→事実婚・内縁）／「配偶者の方は」への下線は 08 にはない	○	○	○
問 8-7	問 8-7	問 8-7	問 8-7	配偶者の最終学歴		○	○	○
問 8-8	問 8-8	問 8-8	問 8-8	配偶者の健康状態		○	○	○
×	問 8-9	問 8-9	問 8-9	配偶者に対する介護責任の認識		—	—	—
問 9	問 9	問 9	問 9	配偶者の現職の有無	無職者に過去の「主な仕事内容」は尋ねないことに変更	○	○	○
問 9-1	問 9-1	問 9-1	問 9-1	配偶者の従業上の地位		○	○	○
問 9-2	問 9-2	問 9-2	問 9-2	配偶者の仕事内容		○	○	○
問 9-3	問 9-3	問 9-3	問 9-3	配偶者の企業規模		○	○	○
問 9-4	問 9-4	問 9-4	問 9-4	配偶者の労働日数	高年票にも追加	○	○	×
問 9-5	問 9-5	問 9-5	問 9-5	配偶者の労働時間	高年票にも追加	○	○	×
問 10	問 10	問 10	問 10	配偶者からの精神的サポート		○	○	○
問 11	問 11	問 11	問 11	結婚生活の満足度		○	○	○

注：「×」はその年齢層の調査票には項目なし。「—」は調査全体でその項目なし。

表 2.2 NFRJ18 の調査項目一覧 (つづき)

NFRJ18 質問番号				質問内容	NFRJ08 からの変更	NFRJ08 での有無		
若年	壮年	高年	統一			若	壮	高
問 11	問 11	問 11	問 11	結婚生活の満足度 (配偶者の仕事)	「(ウ) 配偶者の仕事について」追加	—	—	—
問 12	問 12	×	問 12	ライフイベント時の就業	結婚・出産をきっかけとした仕事の変化の項目から代替	—	—	—
問 13	問 13	×	問 13	ライフイベント時の配偶者の就業		—	—	—
問 14	×	×	問 14	配偶者との話し合いの程度		—	—	—
問 15	×	×	問 15	配偶者との勢力関係		—	—	—
問 16	問 14	問 12	問 16	離死別経験		○	○	○
問 17-1	問 15-1	問 13-1	問 17-1	初婚年齢	質問文：文言追加 (事実婚・内縁も含めるように明記)	○	○	○
問 17-2	問 15-2	問 13-2	問 17-2	初婚配偶者との年齢差	配偶者年齢の代替	—	—	—
問 17-3	問 15-3	問 13-3	問 17-3	初婚配偶者の最終学歴		—	—	—
問 17-4	問 15-4	問 13-4	問 17-4	初婚配偶者にとっても初婚か		—	—	—
問 17-5	問 15-5	問 13-5	問 17-5	初婚の離死別時の年齢		—	—	—
問 17-6	問 15-6	問 13-6	問 17-6	初婚による子どもの有無		—	—	—
問 17-7	問 15-7	問 13-7	問 17-7	離死別後の子どもの養育の有無		—	—	—
問 18	問 16	問 14	問 18	家族規範意識		○	○	○
問 18	問 16	問 14	問 18	家族規範意識 (新)	4 項目追加 【(コ) (サ) (シ) (ス)】	—	—	—
問 19	問 17	問 15	問 19	うつ尺度 (CES-D)		○	○	○
問 20	問 18	問 16	問 20	家族の不安		○	○	○
問 20	問 18	問 16	問 20	家族の不安 (孤独)	「(エ) 自分は孤独だと感じたこと」追加	—	—	—
問 21	×	×	問 21	結婚の願望	枝分かれが複雑なので、対象を無配偶者のみから全員に変更して選択肢で対応	○	○	○
問 22	×	×	問 22	子どもを持つ願望		○	×	×
問 23	問 19	問 17	問 23	結婚・出産のプレッシャー		—	—	—
問 24	問 20	問 20	問 24	健在の子どもの人数	対象を健在の子ども数に限定	○	○	○
問 25	問 21	問 21	問 25	子ども 6 人までの基本情報	(4) の質問文：一部削除 (現在の同別居の有無→現在の同別居)	○	○	○
問 25	問 21	問 21	問 25	子ども 6 人までの基本情報 (実子か)	「(3) 実子かどうか」追加	—	—	—
問 26 ア	問 22 ア	問 22 ア	問 26 ア	子ども：最終学歴	質問文：括弧を削除	○	○	○
問 26 イ	×	×	問 26 イ	子ども：遊ぶ頻度		○	×	×
問 26 ウ	×	×	問 26 ウ	子ども：教育する頻度		○	×	×
問 26 エ	問 22 イ	×	問 26 エ	子ども：育児休業の経験		—	—	—
問 26 オ	問 22 ウ	×	問 26 オ	子ども：乳児期の育児経験		—	—	—
問 26 カ	問 22 エ	×	問 26 カ	子ども：2 歳時の保育		—	—	—
×	問 22 オ	×	問 26 キ	子ども：18 歳以上か		—	—	—
×	問 23 ア	問 22 ア	問 27 ア	子ども：居住距離	選択肢変更 (8 択→6 択に圧縮)	×	○	○
×	問 23 イ	問 22 イ	問 27 イ	子ども：仕事の有無	選択肢変更 (有職者を「週 35 時間以上」、「週 35 時間未満」に細分化)	×	○	○

注：「×」はその年齢層の調査票には項目なし。「—」は調査全体でその項目なし。

表 2.2 NFRJ18 の調査項目一覧（つづき）

NFRJ18 質問番号				質問内容	NFRJ08 からの変更	NFRJ08 での有無		
若年	壮年	高年	統一			若	壮	高
×	問 23 ウ	問 22 ウ	問 27 ウ	子ども：年収		—	—	—
×	問 23 エ	問 22 エ	問 27 エ	子ども：婚姻状態		—	—	—
×	問 23 オ	問 22 オ	問 27 オ	子ども：子どもの年齢構成		×	○	○
×	問 23 カ	問 22 カ	問 27 カ	子ども：会話頻度		×	○	○
×	問 23 キ	問 22 キ	問 27 キ	子ども：金銭的援助を受ける	具体的な援助額を記入してもらおう形式に変更	×	○	○
×	問 23 ク	問 22 ク	問 27 ク	子ども：情緒的援助を受ける		×	○	○
×	問 23 ケ	問 22 ケ	問 27 ケ	子ども：実践的援助を受ける		×	○	○
×	問 23 コ	問 22 コ	問 27 コ	子ども：金銭的援助を与える	具体的な援助額を記入してもらおう形式に変更	×	○	○
×	問 23 サ	問 22 サ	問 27 サ	子ども：情緒的援助を与える		×	○	○
×	問 23 シ	問 22 シ	問 27 シ	子ども：実践的援助を与える		×	○	○
問 26 キ	問 23 ス	問 22 ス	問 27 ス	子ども：関係良好度	壮年票のみ 18 歳未満の子どもとの関係良好度を尋ねない形	○	○	○
問 27	×	×	問 28	子どもとの関わり		○	×	×
問 28	×	×	問 29	子育ての負担		—	—	—
問 29	×	×	問 30	子育ての悩みを相談する相手		—	—	—
問 30	問 24	問 23	問 31	家事頻度	対象を有配偶者のみから全員に変更	○	○	○
問 30	問 24	×	問 31	家事頻度（子育て）	壮年票にも 2 項目追加【(カ) (キ)】	○	×	×
問 31	問 25	問 24	問 32	家事の外部サービスの利用		—	—	—
問 32	問 26	問 25	問 33	夫婦以外に家事をしてくれる人の有無		—	—	—
問 32-1	問 26-1	問 25-1	問 33-1	夫婦以外に家事をしてくれる人		—	—	—
問 33	問 27	問 26	問 34	家計の主観的評価		—	—	—
問 34	問 28	問 27	問 35	健康状態		○	○	○
問 35	問 29	問 28	問 36	生活全体の満足度		○	○	○
問 36	問 30	問 29	問 37	生活の各側面の満足度		—	—	—
問 37	問 31	問 30	問 38	介護が必要な家族の有無		—	—	—
問 37-1	問 31-1	問 30-1	問 38-1	介護が必要な家族の続柄		—	—	—
問 38	問 32	問 31	問 39	自分が介護をしている家族の有無		—	—	—
問 38-1	問 32-1	問 31-1	問 39-1	自分が介護をしている家族の続柄		—	—	—
問 39	問 33	問 32	問 40	かつて自分が介護をした家族の有無		—	—	—
問 39-1	問 33-1	問 32-1	問 40-1	かつて自分が介護をした家族の続柄		—	—	—
問 40	問 34	問 33	問 41	両親の離婚経験の有無		—	—	—
問 41 ア	問 35 ア	問 34 ア	問 42 ア	親：実親か		—	—	—
問 41 イ	問 35 イ	問 34 イ	問 42 イ	親：出生年	選択肢変更（「わからない」無くなる）	○	○	○
問 41 ウ	問 35 ウ	問 34 ウ	問 42 ウ	親：最終学歴		○	○	○
問 41 エ	問 35 エ	問 34 エ	問 42 エ	親：健在か・死亡時の年齢	亡くなった時期（元号表記）は尋ねずに死亡時の本人年齢で代替	○	○	○
問 42 ア	問 36 ア	問 35 ア	問 43 ア	親：健康状態		—	—	—

注：「×」はその年齢層の調査票には項目なし。「—」は調査全体でその項目なし。

表 2.2 NFRJ18 の調査項目一覧 (つづき)

NFRJ18 質問番号				質問内容	NFRJ08 からの変更	NFRJ08 での有無		
若年	壮年	高年	統一			若	壮	高
問 42 イ	問 36 イ	問 35 イ	問 43 イ	親：介護責任の認識		—	—	—
問 42 ウ	問 36 ウ	×	問 43 ウ	親：仕事の有無		○	○	×
問 42 エ	問 36 エ	問 35 ウ	問 43 エ	親：居住距離	選択肢変更 (8 択→6 択に圧縮)	○	○	○
問 42 オ	問 36 オ	問 35 エ	問 43 オ	親：家計の主観的評価		—	—	—
問 42 カ	問 36 カ	問 35 オ	問 43 カ	親：会話頻度		○	○	○
問 42 キ	問 36 キ	×	問 43 キ	親：金銭的援助を受ける	具体的な援助額を記入してもらう形式に変更	○	○	×
問 42 ク	問 36 ク	×	問 43 ク	親：情緒的援助を受ける		○	○	×
問 42 ケ	問 36 ケ	×	問 43 ケ	親：実践的援助を受ける		○	○	×
問 42 コ	問 36 コ	問 35 カ	問 43 コ	親：金銭的援助を与える	具体的な援助額を記入してもらう形式に変更	○	○	○
問 42 サ	問 36 サ	問 35 キ	問 43 サ	親：情緒的援助を与える		○	○	○
問 42 シ	問 36 シ	問 35 ク	問 43 シ	親：実践的援助を与える	高年票にも加える	○	○	×
問 42 ス	問 36 ス	問 35 ケ	問 43 ス	親：関係良好度	高年票にも加える	○	○	×
問 43	問 37	問 36	問 44	兄弟姉妹 (健在) の有無	明確に有無を尋ねる質問を独立	—	—	—
問 43	問 37	問 36	問 44	兄弟姉妹数 (健在)	対象を健在のきょうだい数に限定 (死亡きょうだい数については項目として独立)	○	○	○
問 44 ア	問 38 ア	問 37 ア	問 45 ア	きょうだい：続柄	性別を続柄で代替 (年齢が不明な場合も年上か年下かはわかる)	—	—	—
問 44 イ	問 38 イ	問 37 イ	問 45 イ	きょうだい：年齢差	出生年を年齢差で代替	—	—	—
問 44 ウ	問 38 ウ	問 37 ウ	問 45 ウ	きょうだい：同居	選択肢変更 (8 択→2 択に圧縮)	○	○	○
問 44 エ	問 38 エ	問 37 エ	問 45 エ	きょうだい：最終学歴	選択肢変更 (「未就学」無くなる)。質問文：「中退も」→「中退・在学中も」	○	○	○
問 44 オ	問 38 オ	問 37 オ	問 45 オ	きょうだい：婚姻状態		—	—	—
問 44 カ	問 38 カ	問 37 カ	問 45 カ	きょうだい：家計の主観的評価		—	—	—
×	問 38 キ	問 37 キ	問 45 キ	きょうだい：健康状態		—	—	—
×	問 38 ク	問 37 ク	問 45 ク	きょうだい：介護責任の認識		—	—	—
問 44 キ	問 38 ケ	問 37 ケ	問 45 ケ	きょうだい：会話頻度		○	○	○
問 44 ク	問 38 コ	問 37 コ	問 45 コ	きょうだい：援助を受ける	援助内容を個別 (3 問) に尋ねる形式から 1 問に圧縮	○	○	○
問 44 ケ	問 38 サ	問 37 サ	問 45 サ	きょうだい：援助を与える	援助内容を個別 (3 問) に尋ねる形式から 1 問に圧縮	○	○	○
問 45 ア	問 39 ア	×	問 46 ア	きょうだい：親との同居		—	—	—
問 45 イ	問 39 イ	×	問 46 イ	きょうだい：親に援助を与える		—	—	—
問 46	問 40	問 38	問 47	兄弟姉妹 (死亡) の有無	明確に有無を尋ねる質問を独立	—	—	—
問 46	問 40	問 38	問 47	兄弟姉妹数 (死亡)		○	○	○
問 47	問 41	×	問 48	交際相手の有無	枝分かれが複雑になるので、対象を無配偶者のみから全員に変更。壮年票でも尋ねる	○	×	×

注：「×」はその年齢層の調査票には項目なし。「—」は調査全体でその項目なし。

表 2.2 NFRJ18 の調査項目一覧（つづき）

NFRJ18 質問番号				質問内容	NFRJ08 からの変更	NFRJ08 での有無		
若年	壮年	高年	統一			若	壮	高
問 48	問 42	×	問 49	義親：健在か	結婚後に死亡している場合には時期も尋ねる形式に変更	○	○	×
問 49 ア	問 43 ア	×	問 50 ア	義親：健康状態		—	—	—
問 49 イ	問 43 イ	×	問 50 イ	義親：介護責任の認識		—	—	—
問 49 ウ	問 43 ウ	×	問 50 ウ	義親：仕事の有無		○	○	×
問 49 エ	問 43 エ	×	問 50 エ	義親：居住距離	選択肢変更（8 択→6 択に圧縮）	○	○	×
問 49 オ	問 43 オ	×	問 50 オ	義親：家計の主観的評価		—	—	—
問 49 カ	問 43 カ	×	問 50 カ	義親：会話頻度		○	○	×
問 49 キ	問 43 キ	×	問 50 キ	義親：金銭的援助を受ける	具体的な援助額を記入してもらおう形式に変更	○	○	×
問 49 ク	問 43 ク	×	問 50 ク	義親：実践的援助を受ける		○	○	×
問 49 ケ	問 43 ケ	×	問 50 ケ	義親：金銭的援助を与える	具体的な援助額を記入してもらおう形式に変更	○	○	×
問 49 コ	問 43 コ	×	問 50 コ	義親：実践的援助を与える		○	○	×
問 49 サ	問 43 サ	×	問 50 サ	義親：関係良好度		○	○	×
問 50	問 44	問 39	問 51	相談相手のネットワーク		○	○	○
問 50	問 44	問 39	問 51	相談相手のネットワーク（寝たきり）	「エ」を高年票以外にも加える	×	×	○
問 51	問 45	問 40	問 52	特別な経験		—	—	—
問 52	問 46	問 41	問 53	家族外の交流の程度		—	—	—
問 53	問 47	問 42	問 54	本人・配偶者・世帯収入	3つの収入を1か所に集め、高収入層の選択肢変更	○	○	○
問 54	問 48	問 43	問 55	住居		○	○	○
問 55	問 49	問 18	問 56	同居人数	選択肢変更（「一人暮らし」が選択肢として独立）	○	○	○
問 56	問 50	問 19	問 57	世帯員の続柄	選択肢変更（19 択→15 択に圧縮）	○	○	○

注：「×」はその年齢層の調査票には項目なし。「—」は調査全体でその項目なし。

引用文献

- 木戸功, 2021, 「NFRJ18 質的調査の概要: インタビュー調査を中心に」『家族社会学研究』 33(2):223-228.
- 木戸功・戸江哲理・松木洋人, 2022, 「全国家族調査における質的調査のとりくみ」『社会と調査』 28:27-34.
- 永井暁子・鈴木富美子・知念渉, 2019, 「NFRJ18 予備調査からわかる調査協力意向の傾向」『家族社会学研究』 31(2):190-196.

(保田時男・田中慶子)

3 サンプルングとデータの基本特性

第4回全国家族調査（NFRJ18）の標本抽出・調査実施からデータ作成までの工程は、一般社団法人中央調査社に委託して行った。概要は次のとおりである。

対象：日本国内に居住する 1946～1990 年生まれの日本国民

標本抽出法：層化 2 段無作為抽出法

標本サイズ：5,500 人

（有効回収数 3,033 人 [うち 132 は郵送回収]、有効回収率 55.15%）

調査法：訪問留置法（不在者には郵送調査法での補填を行った）

実査時期：2019 年 1 月～4 月

調査票：対象者を出生年によって 3 層（1946～1955 年生まれ、1956～1970 年生まれ、1971～1990 年生まれ）に分け、調査項目の一部が異なる調査票を使用した（「2 調査票の構造」を参照）

3.1 サンプルング

母集団は、日本国内に居住する 1946～1990 年生まれ（2018 年 12 月 31 日現在で 28～72 歳）の日本国民である。抽出名簿としては、これまでの 3 回の調査と同様に住民基本台帳を用いている。2012 年に住民基本台帳法の改正が施行されたことにより、外国人も住民基本台帳法の適用対象となったが、抽出においては外国人を除いている。

母集団の人口は、住民基本台帳にもとづく 2018 年 1 月 1 日現在の 28～72 歳の推計人口から、74,051,849 人であり、計画標本サイズが 5,500 人なので、抽出確率は $5,500/74,051,849 = 0.0074\%$ である。標本抽出は層化 2 段無作為抽出法で行った。各層の計画標本サイズは表 3.1 のとおりであり、以下の方法で 2 段抽出を行った。

第 1 次抽出は、国勢調査の「基本単位区」を利用して調査すべき地点の抽出を行った。細かい手順は下記のとおりである。

- 1) 全国 47 都道府県を、それぞれ「21 大都市（政令指定都市および東京都特別区部）」、「人口 10 万以上の市」、「その他（人口 10 万未満の市および町村）」の 3 種類に分け、 $47 \times 3 = 141$ の層に層化した。ただし、21 大都市を含まない県が 31 あり、人口 10 万以上の市を含まない県が 1 つあるので、実際に使用したのは $141 - 32 = 109$ の層である。なお、この調査時点での政令指定都市は、札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、横浜市、川崎市、相模原市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、岡山市、広島市、北九州市、福岡市、熊本市であり、NFRJ08 と比べて、岡山市、相模原市、熊本市が加わっている。
- 2) 2018 年 1 月 1 日時点の 28～72 歳人口（住民基本台帳にもとづいて中央調査社が推計）

から、各層で抽出すべき人数を割り当てた。

- 3) 1 地点からおよそ 20 人を抽出できるように、各層から抽出すべき地点数を割り当てた。各層に割り当てられた人数に合わせるため、各地点から抽出する人数を調整した結果、1 地点からの抽出人数は最小で 8 人、最大で 24 人となり、抽出地点数は 289 地点となった。
- 4) 各層に割り当てられた地点数だけ、基本単位区を抽出した。それぞれの基本単位区が抽出される確率は、調査対象人口に比例させ系統抽出した。すなわち、各層の調査対象人口を抽出すべき地点数で割って抽出間隔を求め、等間隔に抽出された当該番目の個人が含まれる基本単位区を調査地点として抽出した。

次に、第 2 次抽出として、各調査地点から割り当てられた人数の個人を等間隔抽出した。細かい手順は下記のとおりである。

- 1) 抽出された基本単位区を含む自治体に住民基本台帳の閲覧を申請した。
- 2) この時期に住民基本台帳の閲覧が認められなかった一部の自治体は、やむをえず同じ層に属する別の自治体を代替として抽出し直した。
- 3) 台帳を閲覧し、当該の基本単位区にあたる地域から等間隔抽出によって、割り当てられた人数の個人を抽出した。すなわち、最初の 1 人は等確率でランダムに選び、2 人目以降は 11 人間隔で選び、選ばれた個人が調査対象の条件に合致した場合は標本として抽出した。
- 4) 基本単位区は非常に狭い区画であるため、終端に達しても抽出すべき年齢に達しないことがある。その場合は、隣接する基本単位区に範囲を延長して等間隔抽出を続けた。
- 5) 各地点からは割り当てられた人数（正規対象）に加えて、21 大都市では 5 人、それ以外の地点では 3 人の「予備対象」を抽出した。予備対象は正規対象が死亡・転居・住所不明の理由で欠票となった場合にのみ調査対象に置き換えるために使用した。

表 3.1 層別の計画標本サイズ

都道府県	市町村の分類			計
	21 大都市	人口 10 万以上 の市	その他	
北海道	89 (4)	65 (3)	82 (4)	236 (11)
青森県		31 (2)	27 (2)	58 (4)
岩手県		23 (1)	31 (2)	54 (3)
宮城県	47 (2)	12 (1)	42 (2)	101 (5)
秋田県		14 (1)	30 (2)	44 (3)
山形県		21 (1)	26 (2)	47 (3)
福島県		46 (2)	37 (2)	83 (4)
茨城県		58 (3)	70 (3)	128 (6)
栃木県		54 (3)	33 (2)	87 (5)
群馬県		53 (3)	31 (2)	84 (5)
埼玉県	57 (3)	184 (8)	83 (4)	324 (15)
千葉県	42 (2)	169 (8)	64 (3)	275 (13)
東京都	416 (19)	151 (7)	33 (2)	600 (28)
神奈川県	262 (12)	113 (5)	27 (2)	402 (19)
新潟県	35 (2)	20 (1)	43 (2)	98 (5)
富山県		25 (2)	20 (1)	45 (3)
石川県		29 (2)	20 (1)	49 (3)
福井県		11 (1)	22 (1)	33 (2)
山梨県		8 (1)	28 (2)	36 (3)
長野県		37 (2)	51 (3)	88 (5)
岐阜県		35 (2)	51 (3)	86 (5)
静岡県	65 (3)	55 (3)	41 (2)	161 (8)
愛知県	98 (5)	137 (6)	85 (4)	320 (15)
三重県		52 (3)	25 (2)	77 (5)
滋賀県		35 (2)	25 (2)	60 (4)
京都府	60 (3)	8 (1)	41 (2)	109 (6)
大阪府	151 (7)	183 (8)	44 (2)	378 (17)
兵庫県	66 (3)	119 (6)	54 (3)	239 (12)
奈良県		26 (2)	33 (2)	59 (4)
和歌山県		16 (1)	26 (2)	42 (3)
鳥取県		15 (1)	10 (1)	25 (2)
島根県		16 (1)	13 (1)	29 (2)
岡山県	30 (2)	25 (2)	26 (2)	81 (6)
広島県	52 (3)	48 (3)	21 (1)	121 (7)
山口県		43 (2)	15 (1)	58 (3)
徳島県		11 (1)	21 (1)	32 (2)
香川県		23 (1)	19 (1)	42 (2)
愛媛県		39 (2)	20 (1)	59 (3)
高知県		15 (1)	16 (1)	31 (2)
福岡県	108 (5)	33 (2)	80 (4)	221 (11)
佐賀県		15 (1)	20 (1)	35 (2)
長崎県		35 (2)	24 (2)	59 (4)
熊本県	32 (2)		43 (2)	75 (4)
大分県		26 (2)	24 (2)	50 (4)
宮崎県		30 (2)	17 (1)	47 (3)
鹿児島県		36 (2)	34 (2)	70 (4)
沖縄県		30 (2)	32 (2)	62 (4)
合計	1610 (77)	2230 (118)	1660 (94)	5500 (289)

注：各層の抽出人数を示す。括弧内は抽出地点数。

3.2 調査実施

2019年1月18日ごろに、中央調査社から各調査対象者（正規対象）の住所あてに事前協力依頼状を発送した。その後、1月25日までに調査員に対する説明会を福岡・広島・大阪・名古屋・東京・仙台・札幌で開催した。説明会は調査の概要と注意事項を示した『調査要領』を配布したうえで、中央調査社社員が説明を行った。

実際の調査は2019年1月26日から3月にかけて訪問留置法によって実施した。中央調査社の調査員が対象者住所を訪問し、調査の趣旨を説明したうえで調査票を預けて対象者本人に記入してもらい、後日再訪問して回収する方法である。訪問時に一時不在だった場合は日時を変えて少なくとも4回は訪問し、各訪問日時は「訪問記録票」に記録する。回収時には本人の許可があれば記入漏れ等を調査員が点検する。

対象者が調査不能で欠票となった場合は、「欠票調査票」（訪問記録票の続きに付属）を記録する。欠票調査票には欠票理由等の状況を記録する。欠票理由が死亡・転居・住所不明の場合は予備対象への置き換えを行う。複数の予備対象のなかでどれを置き換えに用いるかは、単純に抽出順に沿って決定し、対象の性別や年齢は考慮しない。

また、複数の訪問の後も一時不在が続き欠票となった調査対象者については、事後的に調査票を郵送し返信封筒で返送してもらう郵送調査での補填を行った（一部の回収は4月となった）。

3.3 回収状況

NFRJ18の最終的な有効回収数は3033票で有効回収率は55.15%であった。当初の回収数は3044票であったが、クリーニングの過程で11票は無効票と判断された。また、有効回収票の中には事後的な郵送調査による補填を含む。郵送による有効回収票数は132票で、全体の有効回収票数の4.4%を占めた。

NFRJ18の性別・年齢層別の回収状況は表3.2のとおりである。男性の回収率がやや低く、また若年者の回収率が低い傾向がある。また、市町村の区分別の回収状況は表3.3のとおりである。大都市での回収率が低い傾向が読み取れる。これらは比較的一般的な社会調査の回収率傾向に即しているが、回収標本の偏りには留意が必要である。

また、先述のとおり、欠票理由が死亡・転居・住所不明であった場合は予備対象への置き換えを行っている。正規対象の欠票理由の分布は表3.4のとおりであり、死亡・転居・住所不明を合わせた259票が予備対象への置き換え対象となった。厳密には予備対象が再びこのような理由で欠票であった場合には、さらに予備対象に置き換えられている。予備対象への置き換えによって回収された有効回収票数は153票で、全体の有効回収票数の5.0%であった。

表 3.2 性別・年齢層別の回収状況

	抽出人数	有効回収数	有効回収率
男性 28～32 歳	229	103	45.0
男性 33～37 歳	264	130	49.2
男性 38～42 歳	284	137	48.2
男性 43～47 歳	393	218	55.5
男性 48～52 歳	350	178	50.9
男性 53～57 歳	287	151	52.6
男性 58～62 歳	260	143	55.0
男性 63～67 歳	282	165	58.5
男性 68～72 歳	360	206	57.2
男性 計	2709	1431	52.8
女性 28～32 歳	253	129	51.0
女性 33～37 歳	240	136	56.7
女性 38～42 歳	291	170	58.4
女性 43～47 歳	395	229	58.0
女性 48～52 歳	348	195	56.0
女性 53～57 歳	299	184	61.5
女性 58～62 歳	276	158	57.2
女性 63～67 歳	315	196	62.2
女性 68～72 歳	374	205	54.8
女性 計	2791	1602	57.4
合計	5500	3033	55.1

注：抽出人数の性別・年齢は正規対象の抽出者から算出している。有効回収数には予備対象
153 ケース（有効回収の 5.0%）が含まれるため厳密には齟齬がある。

表 3.3 市町村の区分別の回収状況

	抽出人数	有効回収数	有効回収率
21 大都市	1610	765	47.5
人口 10 万以上の市	2230	1274	57.1
その他	1660	994	59.9
合計	5500	3033	55.1

表 3.4 正規対象の欠票理由の分布

	度数	%
転居	177	6.8
入院・入所中	24	0.9
長期不在	47	1.8
一時不在	564	21.6
死亡	6	0.2
健康状態に問題あり	43	1.6
拒否	1555	59.6
住所不明	76	2.9
年齢が対象外	4	0.2
その他	113	4.3
合計	2609	100.0

注：予備対象の欠票理由はこの集計に含まれない。また事後的に郵送回収された対象もこの集計に含まれない（最終的に欠票でないため）。

3.4 第 1～3 回調査との特筆すべき相違点

NFRJ18 は基本的には過去 3 回の NFRJ の調査方法を踏襲しているが、前回調査(NFRJ08)との違いを中心に、特筆すべき相違点を整理する。

(1) 標本規模の縮小

NFRJ18 の計画標本サイズは 5500 人で過去 3 回が 10000 人前後であることに比して大幅に小さくなっている。また、これにともなって 2 段抽出における抽出地点数も少なくなっている (NFRJ08 では 480 地点の抽出だったのに対して NFRJ18 では 289 地点)。相対的に標本誤差が大きくなることには注意が必要である。なお、1 つの地点あたりの抽出人数には大きな違いはない (NFRJ08 ではおよそ 21 人で NFRJ18 ではおよそ 20 人)。

(2) 郵送回収による補填

NFRJ18 では複数の訪問の後も一時不在が続き欠票となった調査対象者については、事後的に郵送調査での補填を行った。前 3 回の調査ではこのような調査モードの変更は基本的に行っていない (例外的に訪問時に調査票を留め置き、郵送で返送してもらうことはあった)。留置調査と郵送調査はいずれも対象者本人が記入する自記式調査とはいえ、何らかの回答傾向の違いが生じる可能性には留意が必要である。なお、予備標本への置き換え方針は、前回調査 (NFRJ08) を踏襲しており違いはない。

(保田時男・田中慶子)

4 データクリーニングの概況

4.1 クリーニング方法

NFRJ18 のデータクリーニングは、「粘土細工アプローチ」(保田 2018) と呼ばれる方法で 1 ケースずつ慎重に修正を行った。粘土細工アプローチでは、あらかじめデータの異常を検知する edit ルールを作成し、ルールに違反するケースにフラグを立てる。1 つの回答ケースについてどのようなフラグが立っているかを確認して、1 ケースずつ異常の原因と適切な修正値を推測して修正を行う。このように慎重な修正を行うのは、NFRJ のような複雑な家族調査では同じ論理エラーでもケースによって異なる原因があり、修正方針が一意に定まりにくいためである。周辺の回答状況からケースごとに適切な修正を考える必要がある。

NFRJ 関連の調査ではパネル調査の NFRJ-08Panel に対してこの方法を適用したことがあり (保田 2014)、NFRJ18 においては edit ルールの作成作業を流用することができた。edit ルールは 1 つの変数の値が許容範囲から外れていないか確認する range edit、枝分かれ質問などにおいて非該当が適切に判断されているかを確認する filter edit、その他の論理矛盾を確認する general edit に分かれるが、NFRJ18 のクリーニングにおいては、最終的に range edit を 585 個、filter edit を 407 個、general edit を 301 個作成した。

クリーニングの実際の経過は表 4.1 のとおりである。クリーニングに先立ち、研究会メンバーは 2019 年 5 月に未クリーニングのデータ ver.1.0 を共有した。ver.1.0 データは変数名、変数ラベルのみを付した SPSS データで回答のまま入力されており、正しい分析結果は得られないものの、早期に分析計画を立てるために有用であった。これを受けて研究会メンバーは 7 月に利用変数や分析方法等を記した研究計画書を提出している。

表 4.1 NFRJ18 のデータクリーニングの経過

年月日	事項
2019 年 5 月 16 日	第一次データ納品 (中央調査社の精査前)
2019 年 5 月 24 日	ver.1.0 データを研究会メンバーに配布
2019 年 7 月 5 日	最終データ納品 (中央調査社の精査済)
2019 年 7 月	(研究会メンバーによる研究計画書の提出)
2019 年 9 月 12 日	分担作業用の ver.1.5 データに更新
2019 年 9 月 22 日	クリーニング分担作業① (慶應義塾大学)
2019 年 9 月 28 日	2 日目の分担作業用に ver.1.7 データに更新
2019 年 9 月 28 日	クリーニング分担作業② (関西大学)
2019 年 10 月 4 日	分担作業の結果を受けて ver.1.8 データに更新
2019 年 10 月 6 日	最終調整をした ver.2.0 データに更新
2019 年 10 月 7 日	クリーニング済みの ver.2.0 データを研究会メンバーに配布
2023 年 5 月	その後の微修正による ver.3.0 データに更新

クリーニング分担作業の直前には、値ラベル付け、計算値変数の計算 (他の回答から計算される合成変数)、追加コードの割り当てを行い、ver.1.5 データを作成した。2019 年 9 月 22 日 (慶應義塾大学) と 9 月 28 日 (関西大学) の 2 日間に研究会メンバーの有志が集まり、

ケースごとのクリーニング分担作業が行われた。分担作業の参加者は、菊澤佐江子、金貞任、牧陽子、俣野美咲、森村繁晴、西野勇人、斉藤知洋、菅澤貴之、田中茜、田中慶子、苫米地なつ帆、筒井淳也、吉田俊文、保田時男（abc 順、敬称略）の 14 名である（他に数人の有志がいたが、日程調整が合わなかった）。

分担作業は図 4.1 のように特定ケースの回答内容と edit ルールの適用結果が参照できるツールを用いて、edit ルールに違反する問題が解消されるように修正値を入力するものである。判断が難しいものについては参加者がその場で協議した。

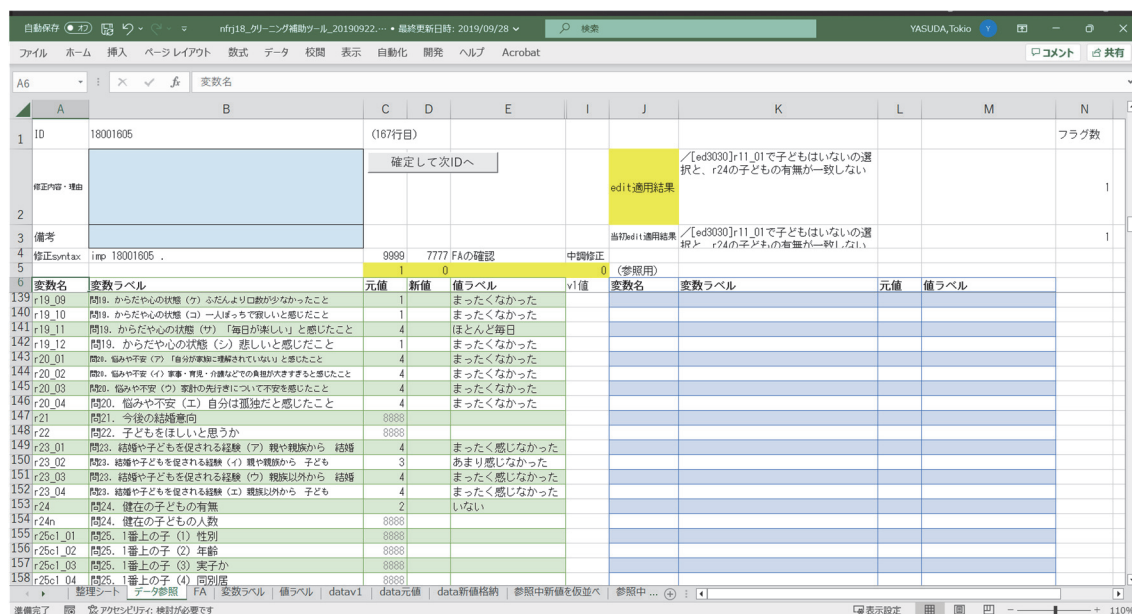


図 4.1 クリーニング作業のケース参照画面

4.2 クリーニング結果

ver.1.5 データに対する 9 月 22 日の作業では、納品 3044 ケース中の 1099 ケースについて作業が完了した。表 4.2 は比較的違反ケースが多かった（10 ケース以上の）edit ルールを列挙したものである。100 ケース以上の違反ケースがあるものもあるが、分担作業の結果、いくつかの edit ルール違反については一括で修正して問題ないことがわかった。また、一部の edit についてはプログラムミスが判明した。そこで、2 日目の 9 月 28 日の作業ではミスを修正したうえで、ある程度は一括修正を施した ver.1.7 データで作業にあたった。この時点で残る 1945 ケース中で個別の分担修正作業が必要な（edit ルールに違反している）ケースは 474 であり、これを 9 月 28 日に分担修正した。原票の PDF 確認が必要なものなど一部作業が残り持ち帰りとなったが、数日後には作業を終え 10 月 6 日にはクリーニング済みのデータを研究会メンバーに配布することができた。クリーニングの結果 11 ケースが無効票となった。

表 4.2 ver.1.5 データについて違反ケースが 10 ケース以上あった edit ルール一覧

edit 番号	違反 ケース数	内容	処理
ed3120	226	r31r_06 で子どもはいないの選択と、r24 の子どもの有無が一致しない	一括修正
ed3121	222	r31r_07 で子どもはいないの選択と、r24 の子どもの有無が一致しない	一括修正
ed3122	131	r31s_06 で子どもはいないの選択と、r24 の子どもの有無が一致しない	一括修正
ed3123	129	r31s_07 で子どもはいないの選択と、r24 の子どもの有無が一致しない	一括修正
ed3299	118	r21 の結婚願望で、r8 と配偶者の有無が一致しない	一括修正
ed3192	96	き 1 の r46s〇_02 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	一括修正
ed3191	93	き 1 の r46s〇_01 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	一括修正
ed3298	66	r39 で自分が介護している家族の有無が、r38 の介護が必要か家族の有無と一致しない	一括修正
ed3068	51	r25 の同居子の有無と r57 の同居子の有無が合わない	
ed3291	51	r54 で収入の「配偶者はいない」と r8 が一致しない	一括修正
ed3096	45	子 2 の r27c〇_01 の同別居が r25 の同別居と合わない（別棟、別室は同居も別居も許容）	
ed3030	43	r11_01 で子どもはいないの選択と、r24 の子どもの有無が一致しない	一括修正
ed3208	43	き 2 の r46s〇_02 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	一括修正
ed3079	42	子 1 の r27c〇_01 の同別居が r25 の同別居と合わない（別棟、別室は同居も別居も許容）	
ed3207	42	き 2 の r46s〇_01 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	一括修正
ed3284	35	r42 で父母のいずれかが実親でないが、r52 で養父母ができたに〇がない	
ed3124	33	r31 カキの 4 間で「子どもはいない」の選択が一致しない	一括修正
ed3090	29	子 2 が 2 歳以下なのに、r26c〇_06 で 3 歳未満が選ばれていない	edit ミス
ed3155	28	r43 での母の同別居が r57 と合わない（別棟・別室は同別居いずれも許容）	
ed3297	24	r57 から計算される最高同居者人数を r56 が上回る	
ed3006	22	r4 で離家したことはないとあるが、r42 で親健在で r57 で現在別居している	
ed3292	21	r56 で一人暮らしで r8 で無配偶なのに、r54 で本人収入と世帯収入が一致しない	
ed3113	20	子 3 の r27c〇_01 の同別居が r25 の同別居と合わない（別棟、別室は同居も別居も許容）	
ed3038	19	r14_02 と r15_02 で「問題が起こる機会はない」が一致しない	
ed3179	18	r44s1 での妹の人数と r45 での妹の人数が合わない	
ed3229	18	r50 での義母の同別居が r57 と合わない（別棟・別室は同別居いずれも許容）	
ed3269	18	r51_03 で「配偶者」を選んでいるが r8 で無配偶	
ed3107	17	子 3 が 2 歳以下なのに、r26c〇_06 で 3 歳未満が選ばれていない	edit ミス
ed3154	17	r43 での父の同別居が r57 と合わない（別棟・別室は同別居いずれも許容）	
ed3177	17	r44s1 での姉の人数と r45 での姉の人数が合わない	
ed3276	17	r51_04 で「配偶者」を選んでいるが r8 で無配偶	
ed3036	16	r12_04 と r13_04 で「2 人目の実子 3 歳以上」の有無が合致しない（夫婦いずれかが再婚の場合は許容）	
ed3224	16	き 3 の r46s〇_02 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	
ed3223	15	き 3 の r46s〇_01 で両親とも死亡のコードが r42 と合わない	
ed3255	15	r51_01 で「配偶者」を選んでいるが r8 で無配偶	
ed3295	15	r57 で単独属性のみからなる家族で、計算される人数が r56 と一致しない	
ed3037	13	r14_01 と r15_01 で「問題が起こる機会はない」が一致しない	
ed3194	13	き 1 の r46s〇_01 と 02 で両親とも死亡のコードが一致しない	
ed3195	13	き 1 の r45s〇_03 で同居しているが r57 できょうだいとの同居がない	
ed3056	12	初婚離死別後、再婚していないが、r25 の子 1 が r17s6 で離死別時にいなかった実子	
ed3178	12	r44s1 での弟の人数と r45 での弟の人数が合わない	
ed3262	12	r51_02 で「配偶者」を選んでいるが r8 で無配偶	
ed3039	11	r14_03 と r15_03 で「問題が起こる機会はない」が一致しない	
ed3294	11	r56 で同居者がいるのに r57 で同居者がいない	
ed3231	10	き 1 の年齢ときょうだい順位が一致しない	
ed3232	10	き 2 の年齢ときょうだい順位が一致しない	

データ納品後 5 カ月程度でクリーニング済みデータが共有できたことはじゅうぶんな速さで、下準備は必要なものの粘土細工アプローチによるクリーニングは NFRJ データに有効に働いたと考えている。なお、ver.2.0 データの配布後に edit ルールの見落としが判明した「親子の年齢差が異常なケースの問題」については、問題が軽微であったため研究会での修正データ配布は行わなかった。データアーカイブでの公開データは修正済みのデータ (ver.3.0) となる予定である。

引用文献

保田時男, 2014, 「データクリーニングについて」 『全国家族調査パネルスタディ (NFRJ-08Panel) 報告書』 217-229.

保田時男, 2018, 「複雑な社会調査におけるデータ・クリーニング技法の開発」 保田時男編 『2015 年 SSM 調査報告書 1 調査方法・概要』 177-200.

(保田時男)

Ⅱ 調査結果の概要

調査結果集計一覧

1 学歴、就業、婚姻などの基本属性

- (1) 標本サイズなど
- (2) 世帯構成
- (3) 学歴
- (4) 離家経験
- (5) 就業
- (6) 従業上の地位
- (7) 婚姻上の地位

2 さまざまな意識

- (1) 仕事と家庭の両立意識（就業者のみ）
- (2) 夫婦関係の意識（有配偶者のみ）
- (3) 夫婦関係の満足度（有配偶者のみ）
- (4) 夫婦の話し合いと意見（有配偶者のみ）【若年】
- (5) 性別分業意識
- (6) うつ尺度
- (7) 不安意識
- (8) 結婚・子ども希望【若年】
- (9) 結婚・出産への圧力

3 子どもとの関係

- (1) 子どもとの関わり
- (2) 子どもとの援助の授受【壮年・高年】
- (3) 子どもとの関係良好度
- (4) 子育て負担【若年】
- (5) 子育て参考情報【若年】

4 家事頻度・生活意識

- (1) 家事・子育て頻度
- (2) 各種の生活意識
- (3) 介護経験

5 父母との関係

- (1) 会話頻度
- (2) 援助の授受
- (3) 父母との関係良好度

注：集計はNFRJ18 データ ver.2.0 のものである。

1 学歴、就業、婚姻などの基本属性

(1) 標本サイズなど

NFRJ18 第一次報告書では、性・年齢（5 歳階級）ごとの主要項目の分布を紹介する。グラフ作成の際には集計を簡略化した箇所がある。元の数値が必要な場合は付表を参照されたい。

最初に、男女・年齢階級別のサンプルサイズを確認すると表 1 のようになっている。以下の集計では、これらが集計の基数（分母）となっている。ただし、無回答および非該当は集計から除外している。

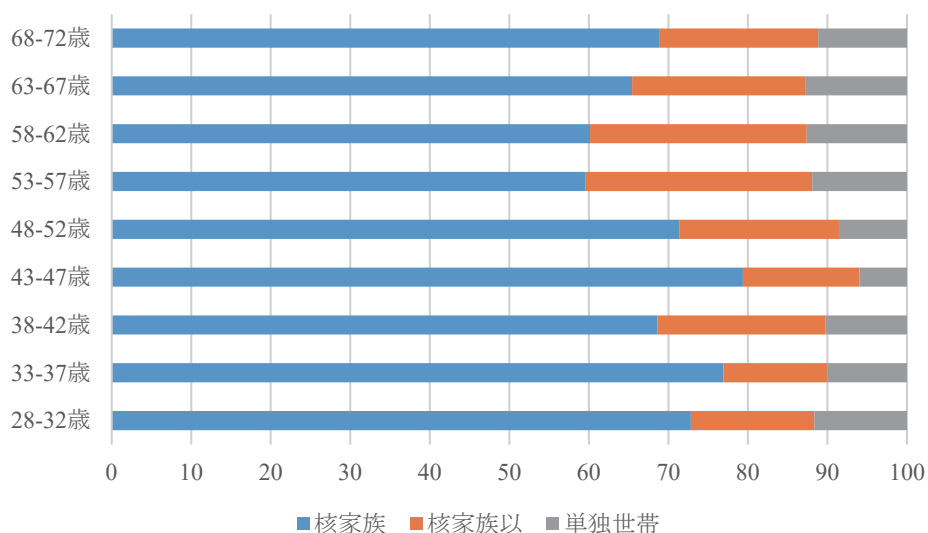
なお、調査票は対象者の年齢に応じて若年票（28-47 歳）、壮年票（48-62 歳）、高年票（63-72 歳）の 3 種類がある。報告書内では、若年票限定の項目については【若年】などと記載している。

表 1 男女・年齢別の有効回答数

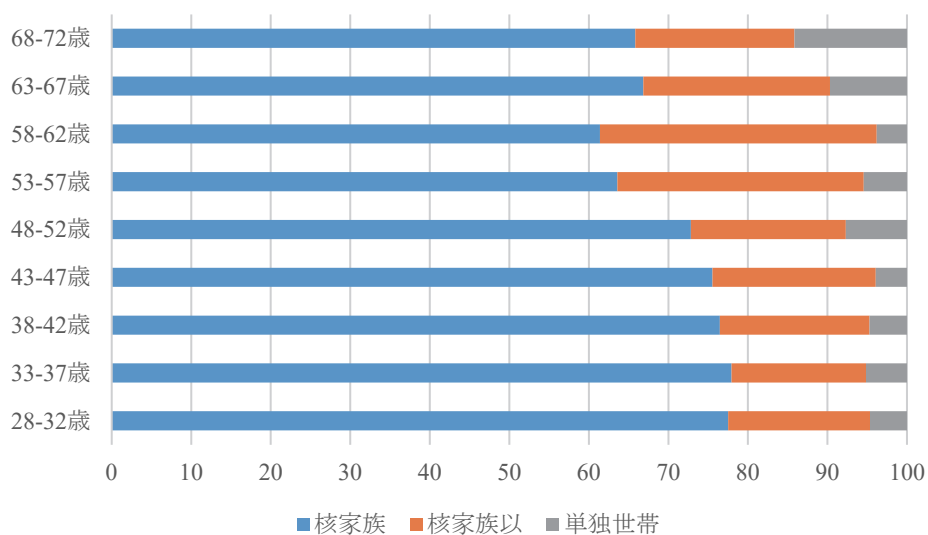
	男性	女性	Total
28-32 歳	103	129	232
33-37 歳	130	136	266
38-42 歳	137	170	307
43-47 歳	218	229	447
48-52 歳	178	195	373
53-57 歳	151	184	335
58-62 歳	143	158	301
63-67 歳	165	196	361
68-72 歳	206	205	411
Total	1,431	1,602	3,033

(2) 世帯構成

問 56・57 をもとに簡易の世帯構造を定義する。核家族とは、(i) 夫婦のみ、(ii) 夫婦と子ども、(iii) ひとり親と子どもから成る世帯を指す。なお、本来は未婚の子に限定すべきであるが、ここでは「子ども」を婚姻情報は考慮していない。



(a) 年齢別の世帯構造の分布 (男性)

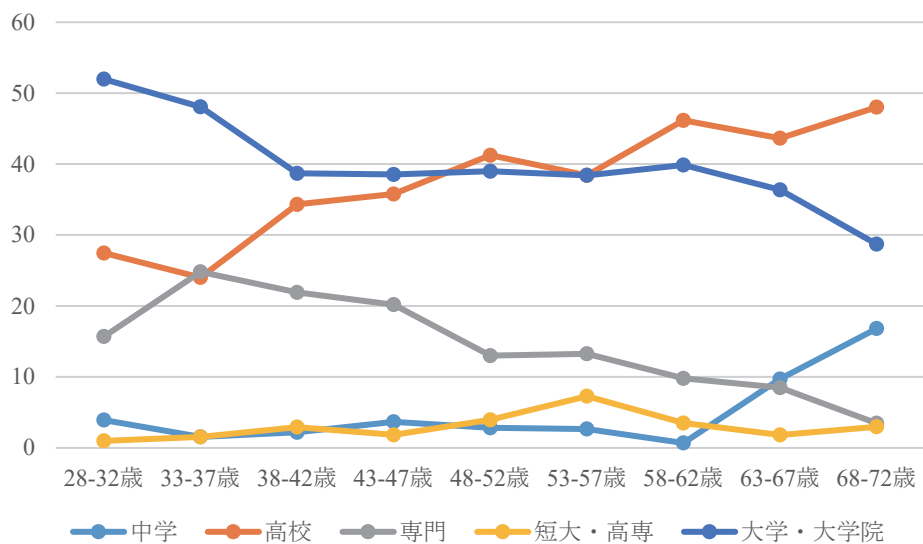


(b) 年齢別の世帯構造の分布 (女性)

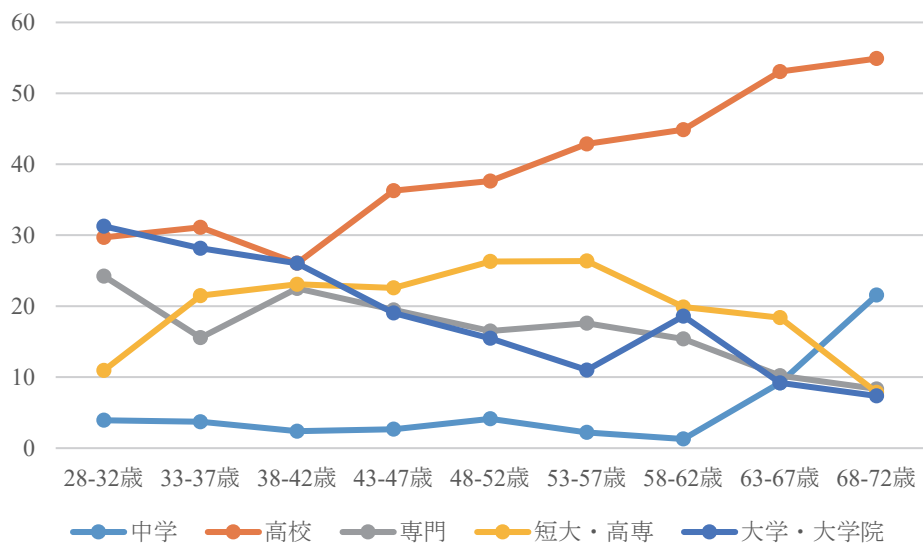
図1 男女・年齢別の世帯構造の分布

(3) 学歴

問3より作成。大学院は大学に含めて集計した。中退・在学中は卒業と同じ扱いとなる。
 なお、少数の「その他」を集計から除外している。



(a) 年齢別の学歴分布 (男性)



(b) 年齢別の学歴分布 (女性)

図2 男女・年齢別の学歴構成

(4) 離家経験

問 4 より作成。離家とは「はじめて親と離れて1年以上別の世帯で暮らした」経験のこと。

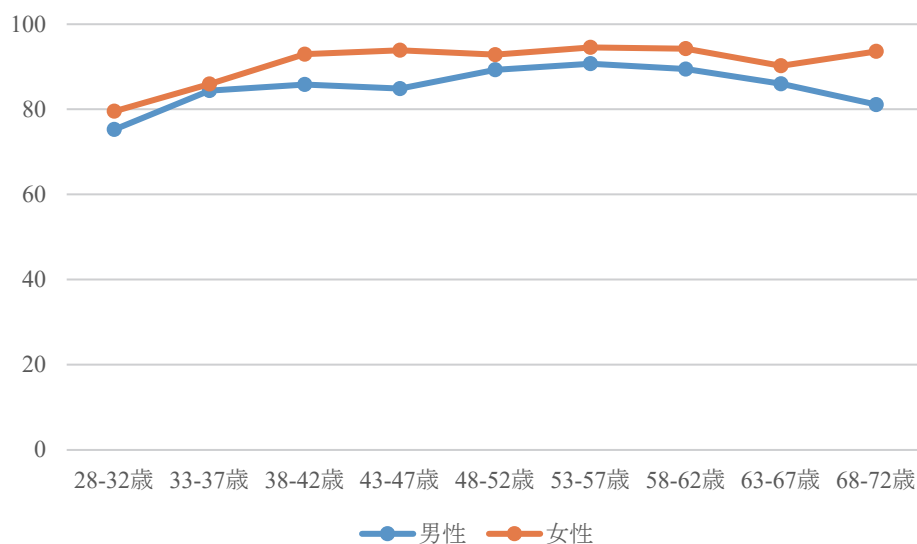


図 3 男女・年齢別の離家経験率

(5) 就業

問 6 より作成。「現在、収入をとまなう仕事についていますか」について「ついている」「ついているが休職中」「今はついていないが、過去についていた」「仕事についたことはない」の4つの選択肢で回答。「ついている」と「ついているが休職中」を就業者とした。

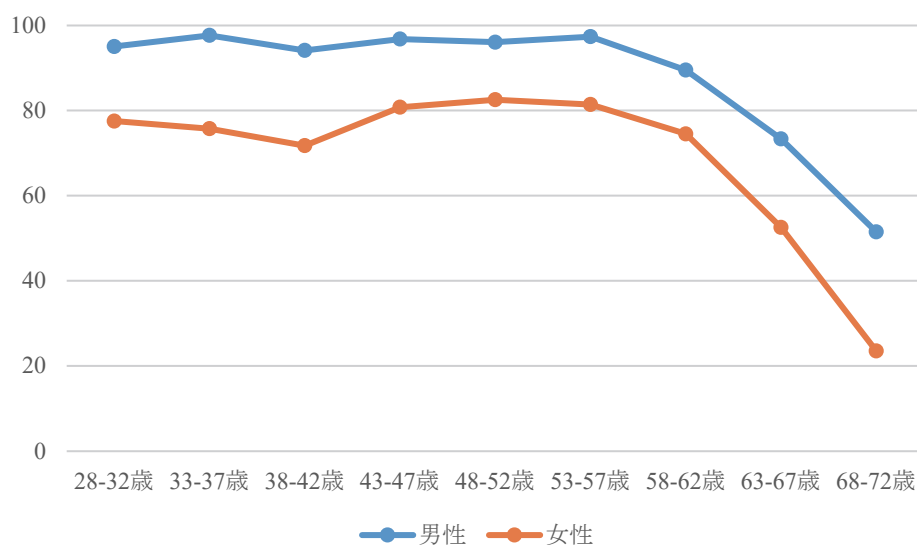
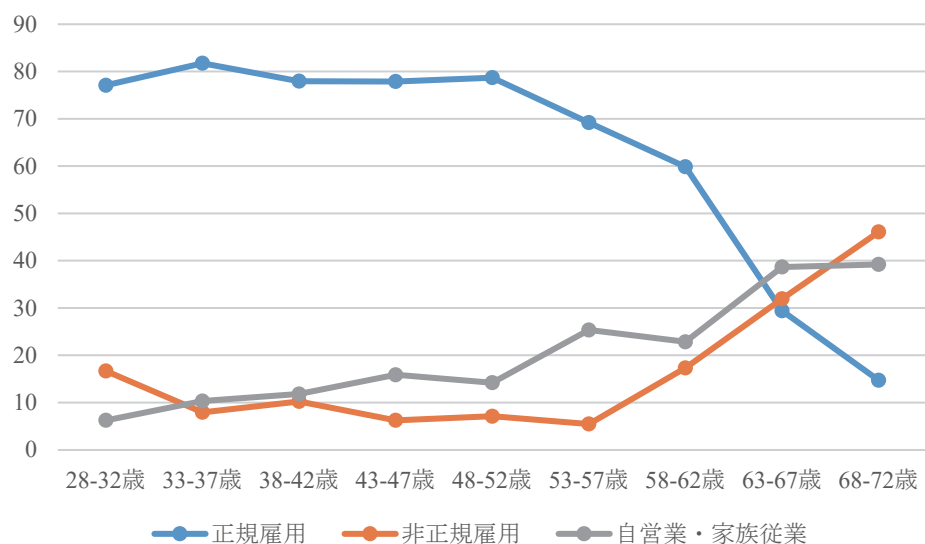


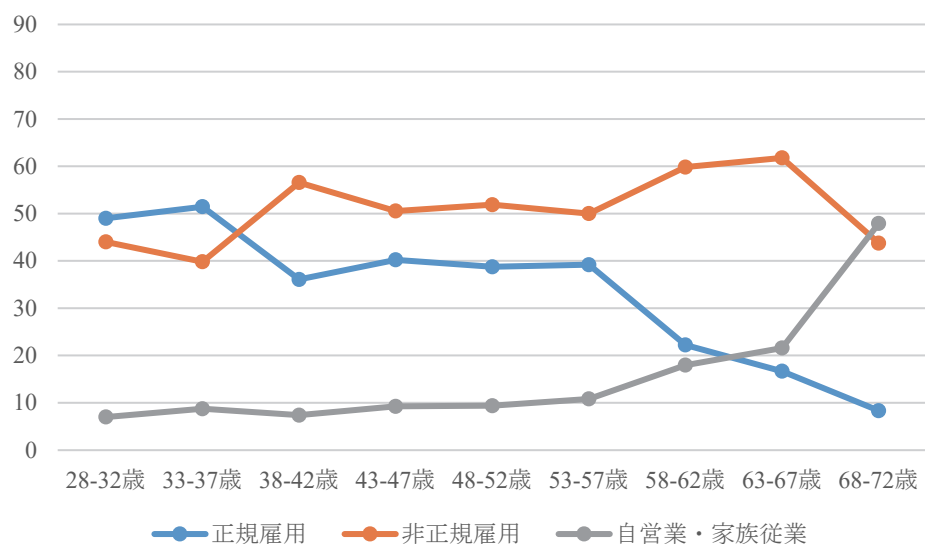
図 4 男女・年齢別の就業率

(6) 従業上の地位

問 6-1 より作成。「常時雇用されている一般従業者（公務員を含む）」を正規雇用、「臨時雇い・パート・アルバイト」「派遣社員・契約社員・嘱託社員」を非正規雇用、「経営者・役員」「自営業主・自由業者」「自営業の家族従業者」「内職」を自営業・家族従業者とし、就業者に占める比率を示した。



(a) 年齢別の従業上の地位（男性）

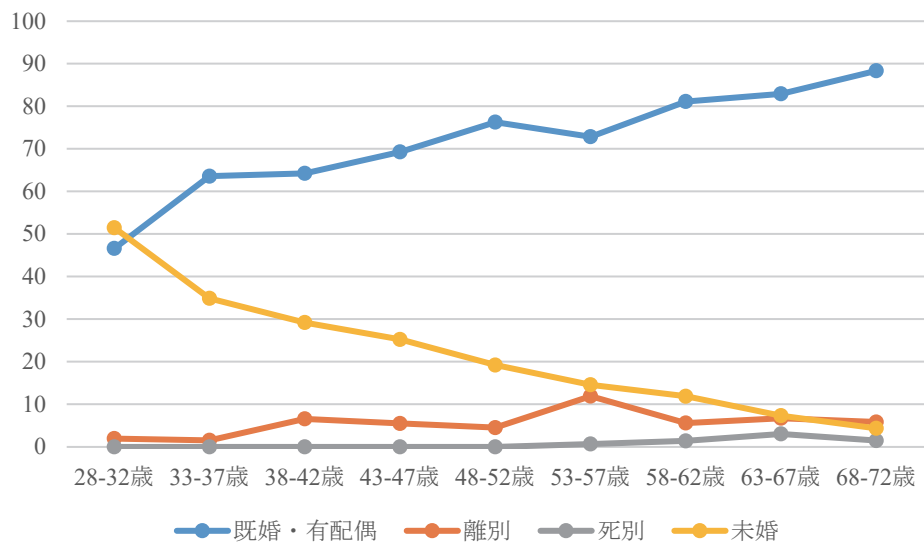


(b) 年齢別の従業上の地位（女性）

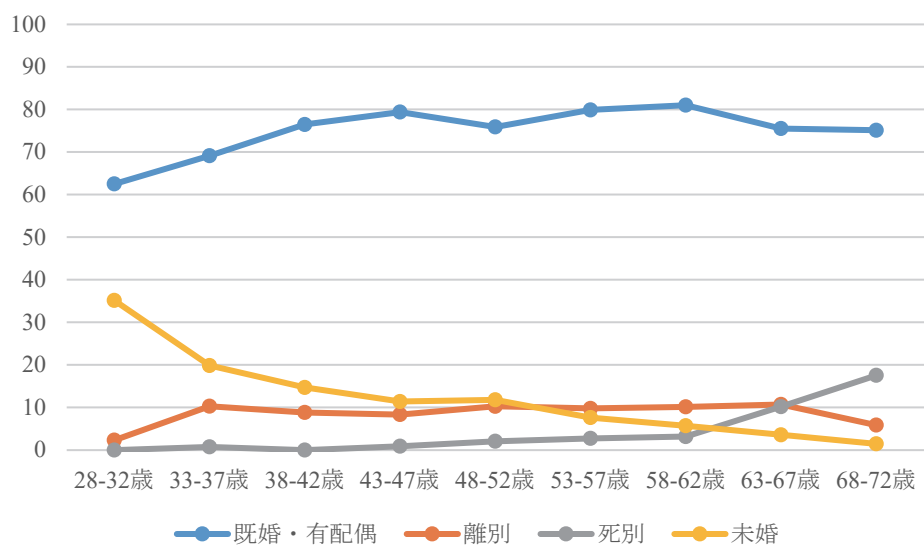
図5 男女・年齢別の従業上の地位（就業者に占める比率）

(7) 婚姻上の地位

問 8 より作成。



(a) 年齢別の婚姻上の地位 (男性)



(b) 年齢別の婚姻上の地位 (女性)

図 6 男女・年齢別の婚姻上の地位

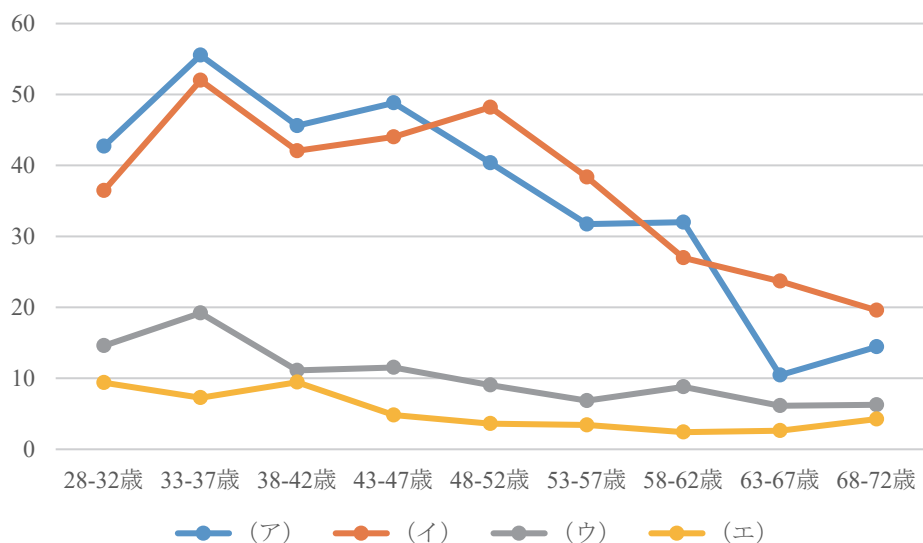
2 さまざまな意識

(1) 仕事と家庭の両立意識（就業者のみ）

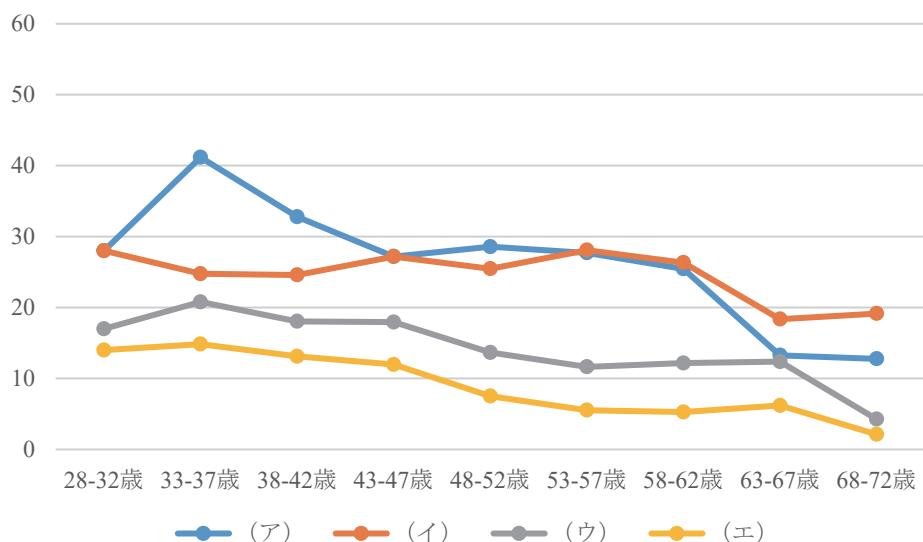
問7 あなたの仕事と家族関係についてうかがいます。次の問いについて、もっとも実態に近いと思う番号に○をつけてください。

- (ア) 仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分とれないでいる
- (イ) 家にも仕事のことを気になってしかたがないことがある
- (ウ) 家族のあれやこれやで思うように仕事に時間を配分できない
- (エ) 家事や育児で疲れてしまい、仕事をやろうという気持ちになれない

選択肢：「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」



(a) 年齢別の仕事と家庭の両立意識（男性）



(b) 年齢別の仕事と家庭の両立意識（女性）

図7 男女・年齢別の仕事と家庭の両立意識（4項目）

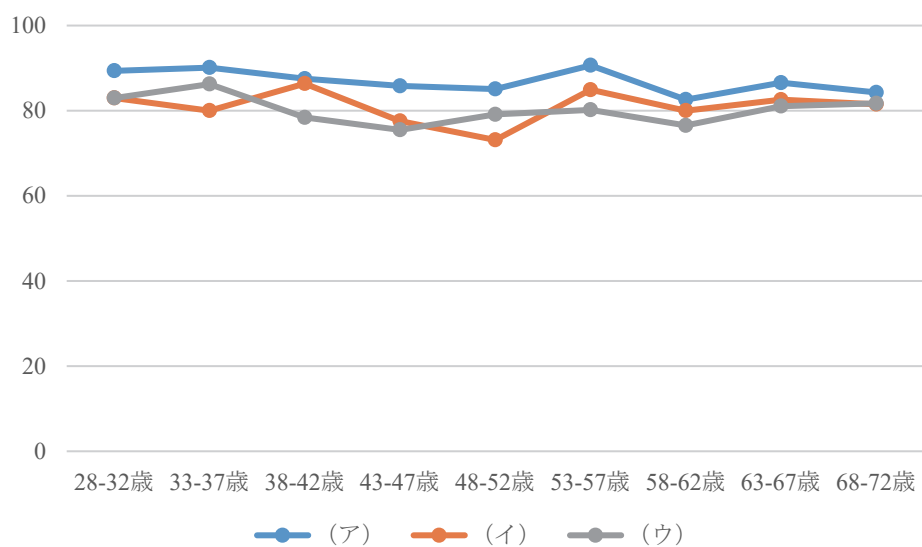
注：「あてはまる」「ややあてはまる」の合計比率

(2) 夫婦関係の意識（有配偶者のみ）

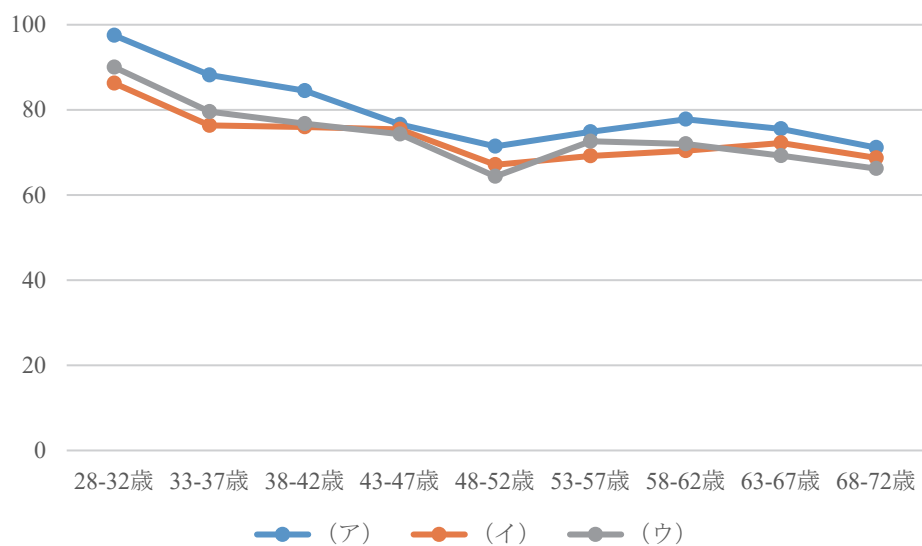
問 10 次にあげる（ア）～（ウ）のそれぞれの項目について、あなたは、あなた方ご夫婦にどの程度あてはまるとお考えですか。

- （ア） 配偶者は、わたしの心ごとや悩みを聞いてくれる
- （イ） 配偶者は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる
- （ウ） 配偶者は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる

選択肢：「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」



(a) 年齢別の夫婦の情緒関係（男性）



(b) 年齢別の夫婦の情緒関係（女性）

図 8 男女・年齢別の夫婦の情緒関係（3項目）

注：「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」の合計比率

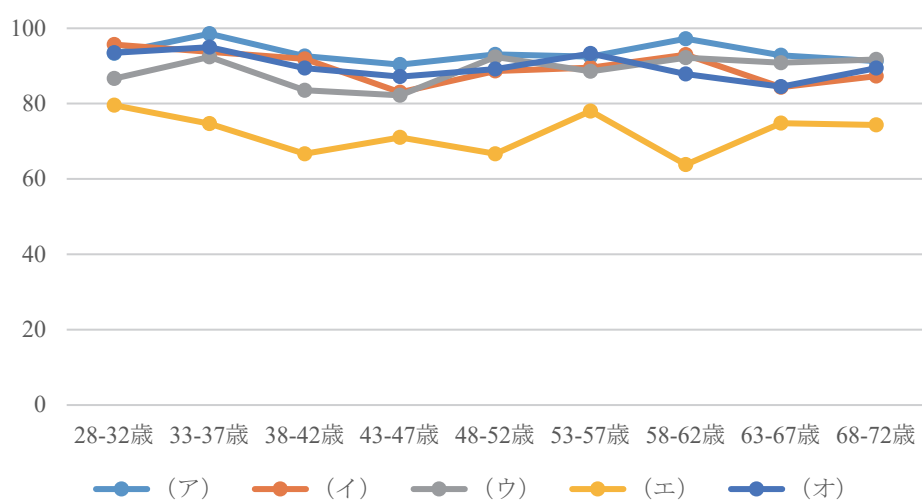
(3) 夫婦関係の満足度（有配偶者のみ）

問 11 あなたの結婚生活で次にあげる（ア）～（オ）の点について、あなたはどれくらい満足していますか。

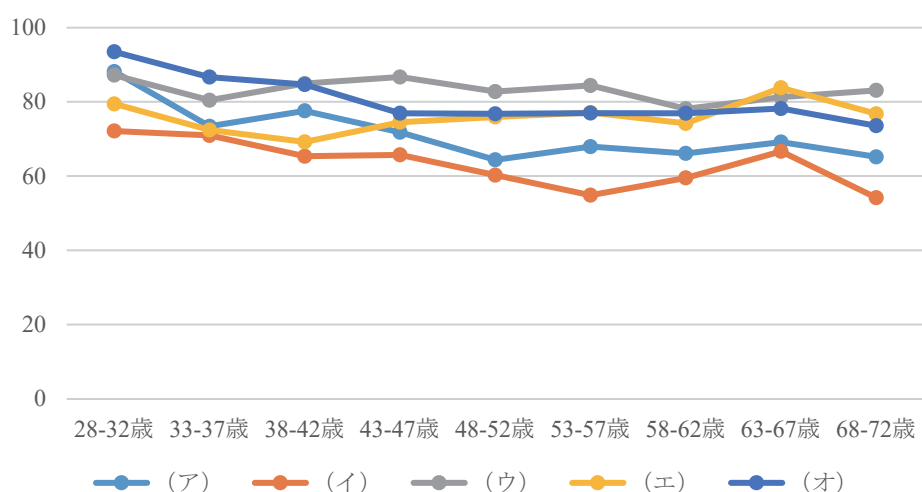
- （ア） 子育てに対する、配偶者の取り組み方について
- （イ） 家事に対する、配偶者の取り組み方について
- （ウ） 配偶者の仕事について（無職の場合は、仕事をしていない状態について）
- （エ） 性生活について
- （オ） 夫婦関係全体について

選択肢：「かなり満足」「どちらかといえば満足」「どちらかといえば不満」「かなり不満」

注：（ア）には「子どもはいない」という選択肢が別にある



(a) 年齢別の夫婦関係満足度（男性）



(b) 年齢別の夫婦関係満足度（女性）

図 9 男女・年齢別の夫婦関係満足度（5項目）

注 1：「かなり満足」＋「どちらかといえば満足」の合計の比率

注 2：（ア）は「子どもはいない」を集計から除外した。

(4) 夫婦の話し合いと意見（有配偶者のみ）【若年】

問 14 次のような問題について考えないといけないとき、夫婦で十分に話し合っていると思いますか。

- (ア) 子どもへの接し方や教育方針について
- (イ) 家事のやり方や分担について
- (ウ) お金の使い方など家計の問題について

選択肢：「十分に話し合っている」「ある程度話し合っている」「どちらともいえない」「あまり話し合っていない」「まったく話し合っていない」

問 15 次のような問題について、夫婦のどちら意見が通ること多いと思いますか。

- (ア) 子どもへの接し方や教育方針について
- (イ) 家事のやり方や分担について
- (ウ) お金の使い方など家計の問題について

選択肢：「自分の意見」「どちらかといえば自分の意見」「どちらともいえない」「どちらかといえば配偶者の意見」「配偶者の意見」

注：両設問とも、別途「そのような問題が起こる機会はない」を設けている

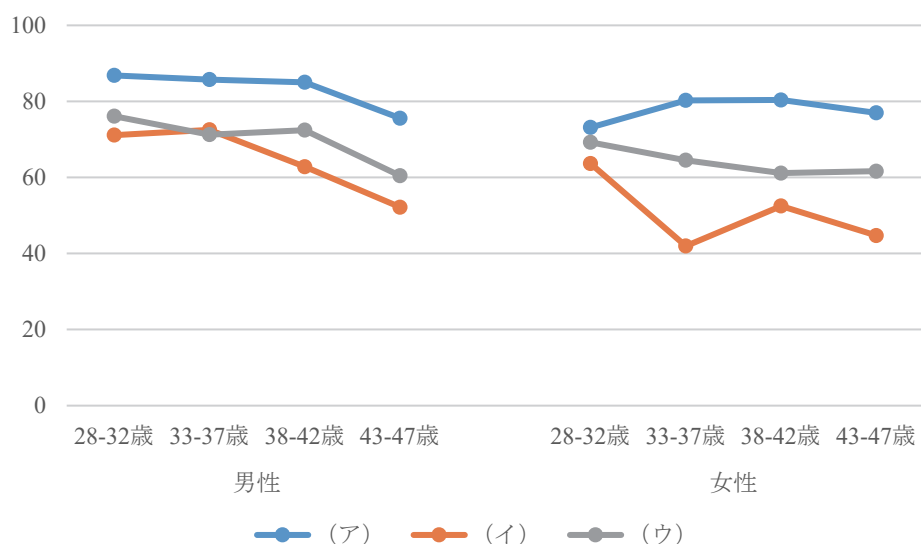


図 10 男女・年齢別の夫婦の話し合い（3項目）

注 1：「十分話し合っている」＋「ある程度話し合っている」の合計比率

注 2：(ア)～(ウ)で各 11.2%、2.3%、1.0%（男女計）の「そのような問題が起こる機会はない」を集計からは除外した。

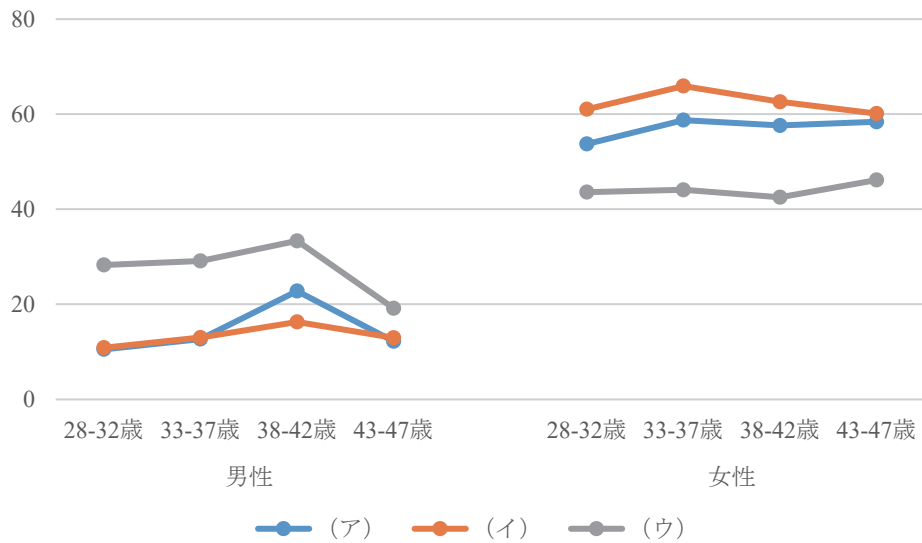


図 11 男女・年齢別の夫婦の意見（3項目）

注 1：「自分の意見」＋「どちらかといえば自分の意見」の合計比率

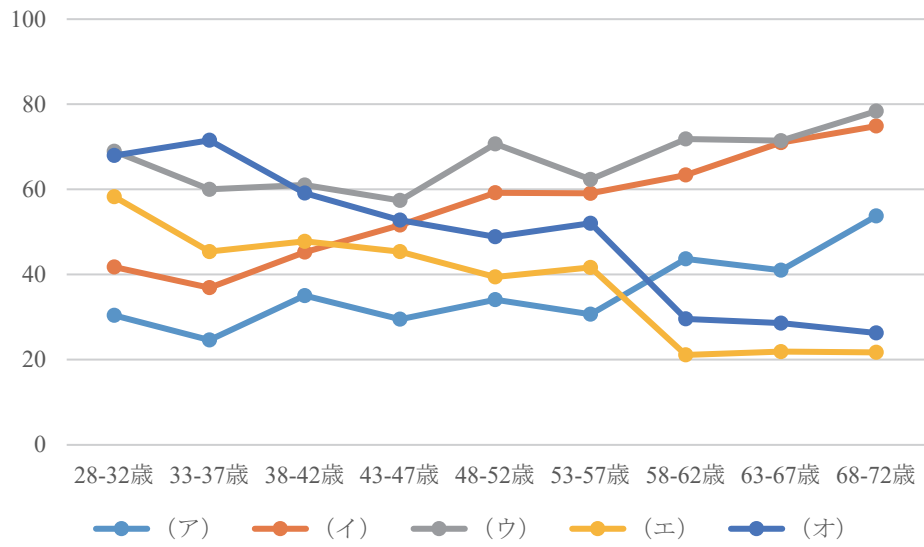
注 2：（ア）～（ウ）で各 11.3%、2.3%、1.0%（男女計）の「そのような問題が起こる機会はない」を集計から除外した。

(5) 性別分業意識

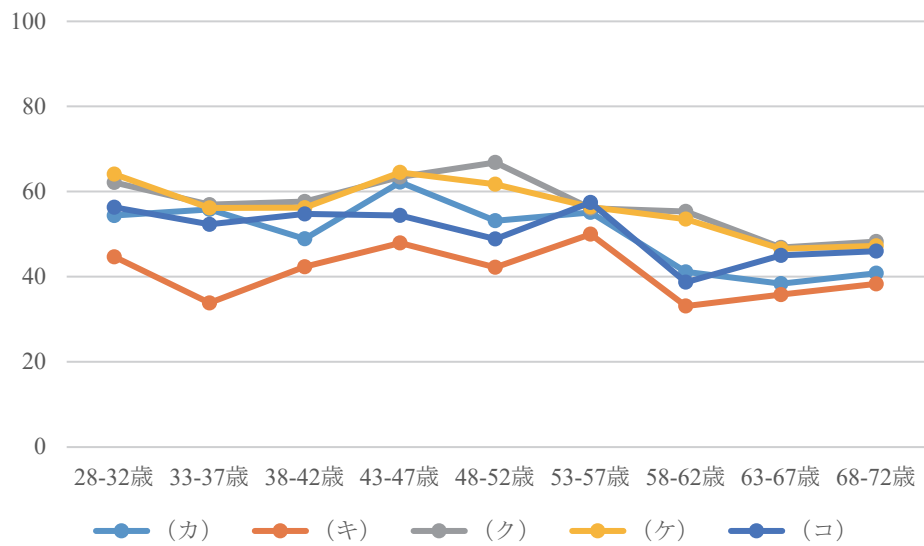
問 18 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちにもっとも近いものをそれぞれ1つずつ選んでください。

- (ア) 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである
- (イ) 子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ
- (ウ) 家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ
- (エ) 夫婦は、お互いの同意があれば、入籍しなくてもかまわない
- (オ) 結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はない
- (カ) 結婚しても、相手に満足できないときは離婚すればよい
- (キ) 親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ
- (ク) 年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ
- (ケ) 親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだ
- (コ) 婚姻届を出していないカップルでも、子どもを産んだり育てたりしてかまわない
- (サ) 男同士や女同士の結婚も、法律で認められるべきだ
- (シ) 結婚は、してもしなくてもどちらでもかまわない
- (ス) 親がふたりそろっていなくても、子どもを産んだり育てたりしてかまわない

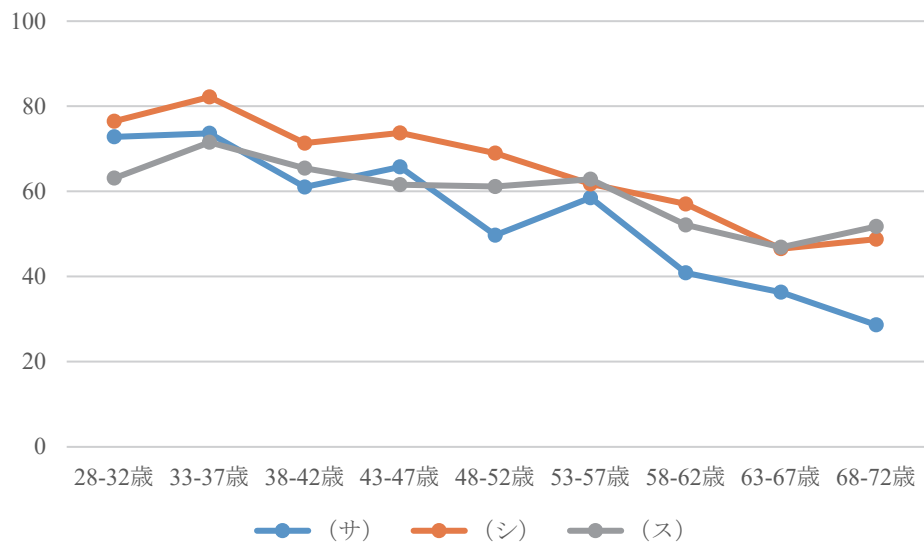
選択肢：「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえそう思わない」「そう思わない」



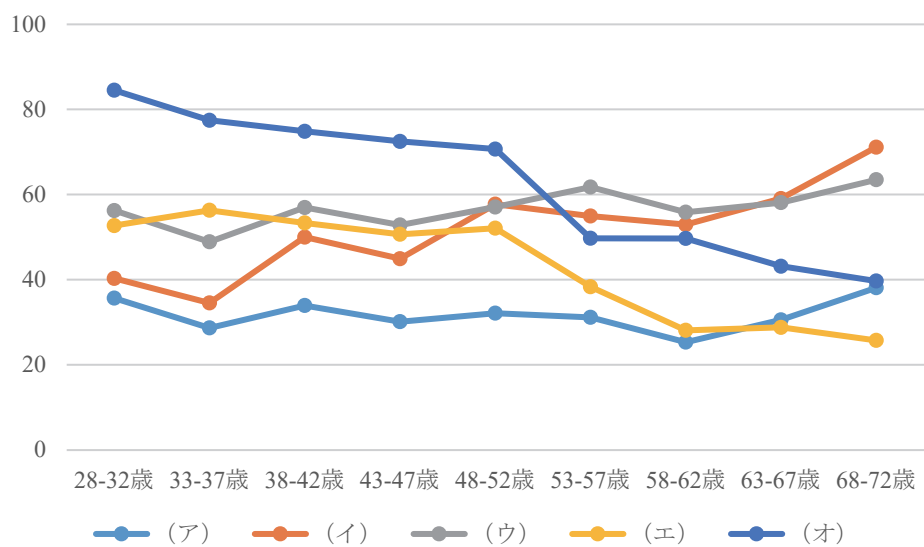
(a-1/3) 年齢別の性別分業意識 (男性)



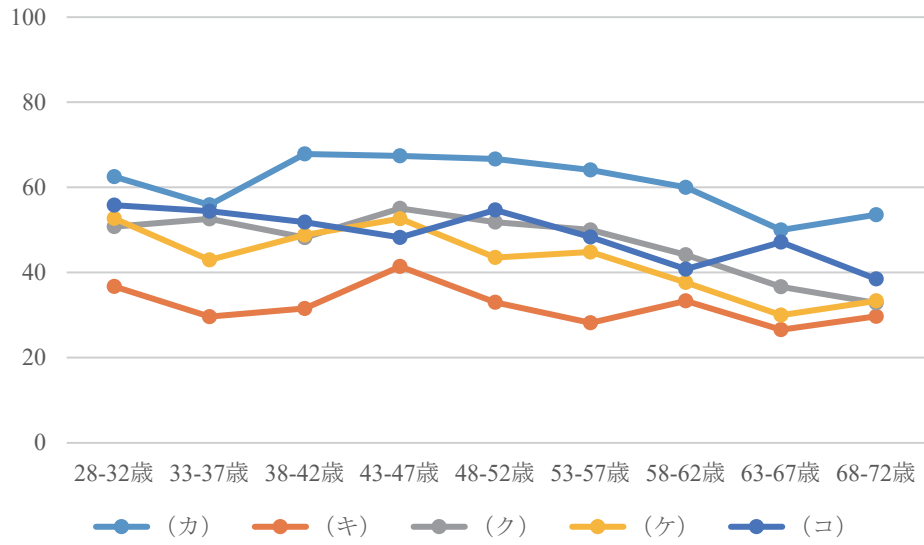
(a-2/3) 年齢別の性別分業意識 (男性)



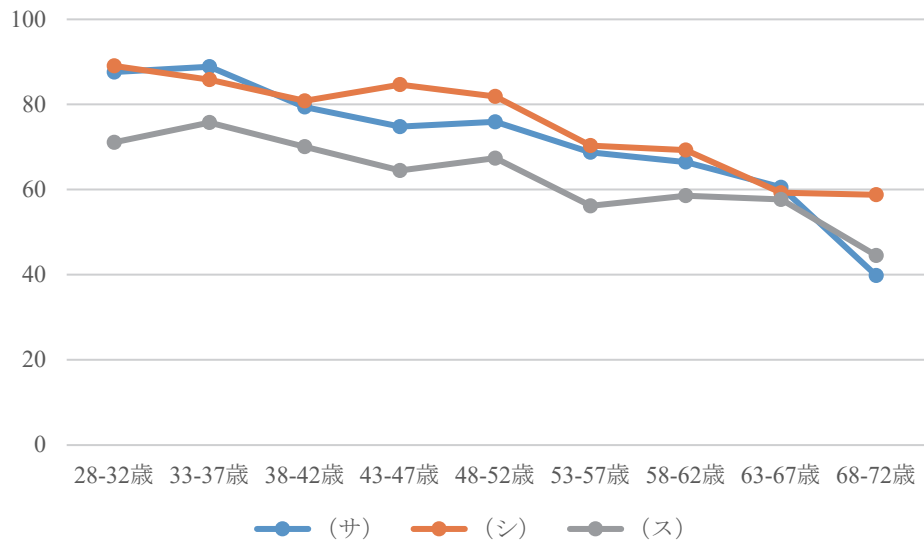
(a-3/3) 年齢別の性別分業意識布 (男性)



(b-1/3) 年齢別の性別分業意識 (女性)



(b-2/3) 年齢別の性別分業意識 (女性)



(b-3/3) 年齢別の性別分業意識 (女性)

図 12 男女・年齢別の性別分業意識 (13 項目)

注: 「そう思う」 + 「どちらかといえばそう思う」の合計比率

(6) うつ尺度

問 18 次のような意見について、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちにもっとも近いものをそれぞれ1つずつ選んでください。

- (ア) ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと
- (イ) 家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと
- (ウ) 憂うつだと感じたこと
- (エ) 物事に集中できなかったこと
- (オ) 食欲が落ちたこと
- (カ) 何をするのも面倒と感じたこと
- (キ) 何か恐ろしい気持がしたこと
- (ク) なかなか眠れなかったこと
- (ケ) ふだんより口数が少なくなったこと
- (コ) 一人ぼっちで寂しいと感じたこと
- (サ) 「毎日が楽しい」と感じたこと
- (シ) 悲しいと感じたこと

選択肢：「まったくなかった」「週に1～2日」「週に3～4日」「ほとんど毎日」

「まったくなかった」「週に1～2日」「週に3～4日」「ほとんど毎日」のそれぞれに0,1,2,3のスコアを与え、その合計得点（最小0、最大36）の平均値を示した。

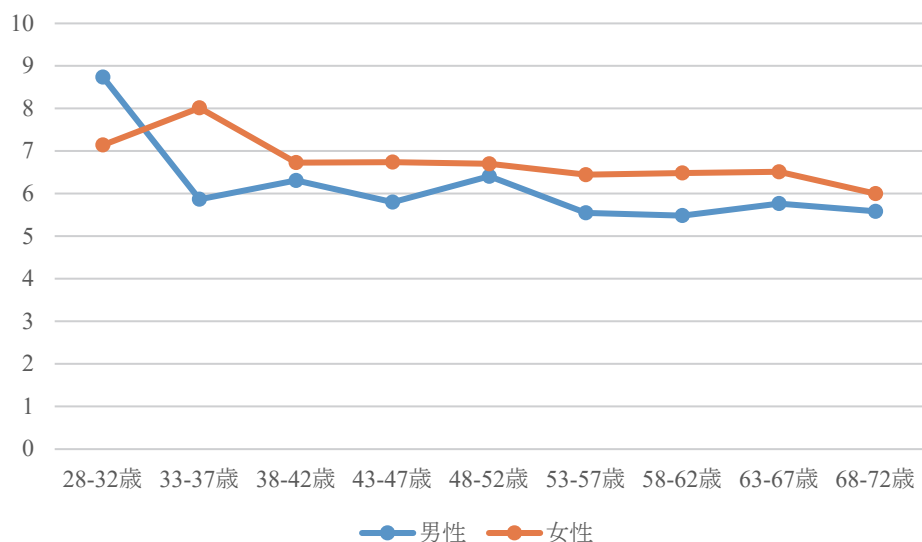


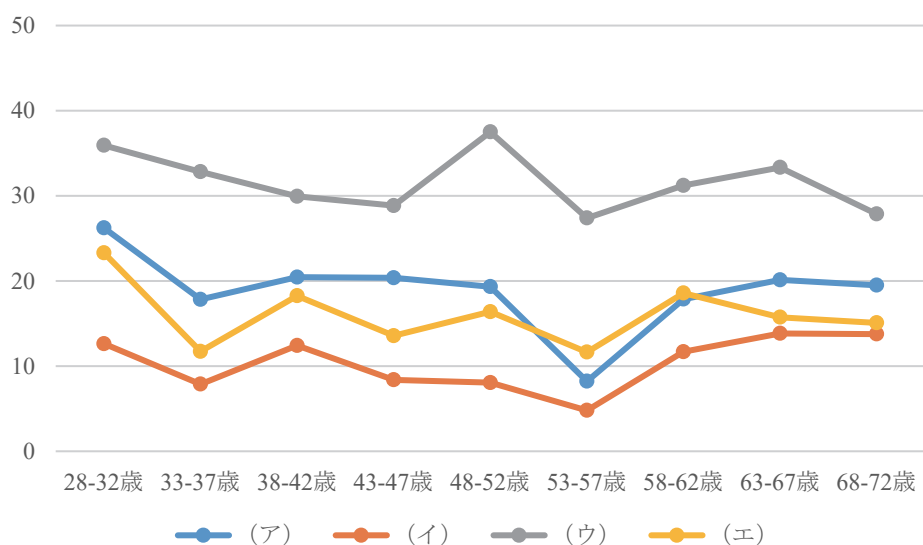
図 13 男女・年齢別のうつ尺度の平均

(7) 不安意識

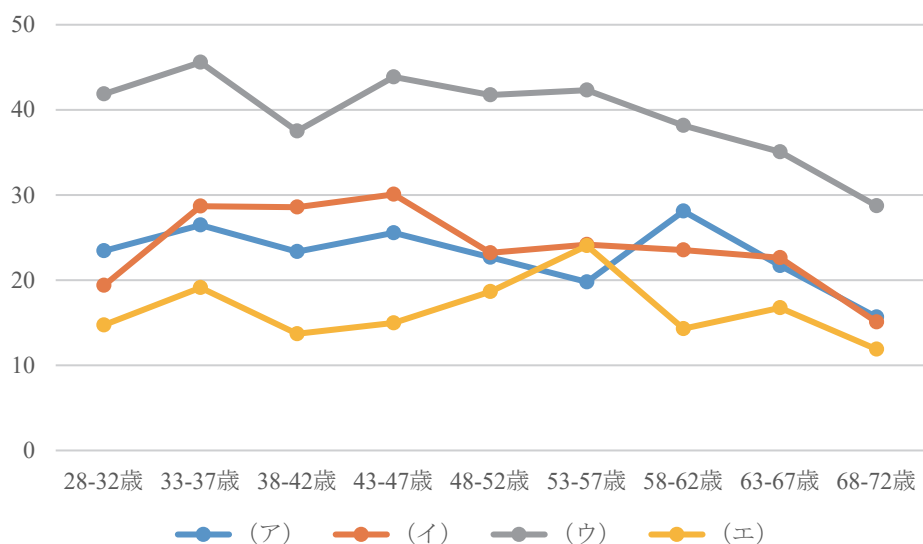
問 20 この1カ月ほどの間に、あなたには次のようなことがどのくらいありましたか。
それぞれについて教えてください。

- (ア) 「自分が家族に理解されていない」と感じたこと
- (イ) 家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと
- (ウ) 家計の先行きについて不安を感じたこと
- (エ) 自分は孤独だと感じたこと

選択肢：「何度もあった」「ときどきあった」「ごくまれにあった」「まったくなかった」



(a) 年齢別の各種不安意識 (男性)



(b) 年齢別の各種不安意識 (女性)

図 14 男女・年齢別の不安意識 (4項目)

注：「何度もあった」＋「ときどきあった」の合計比率

(8) 結婚・子ども希望【若年】

問 21 あなたは今後、結婚したいと思いますか。
 1 絶対したい 2 なるべくしたい 3 どちらともいえない
 4 あまりしたくない 5 絶対にしたくない 6 現在、配偶者がいる

問 22 子どもを（もう1人）ほしいと思いますか。
 1 絶対ほしい 2 ほしい 3 どちらともいえない
 4 あまりほしくない 5 絶対ほしくない

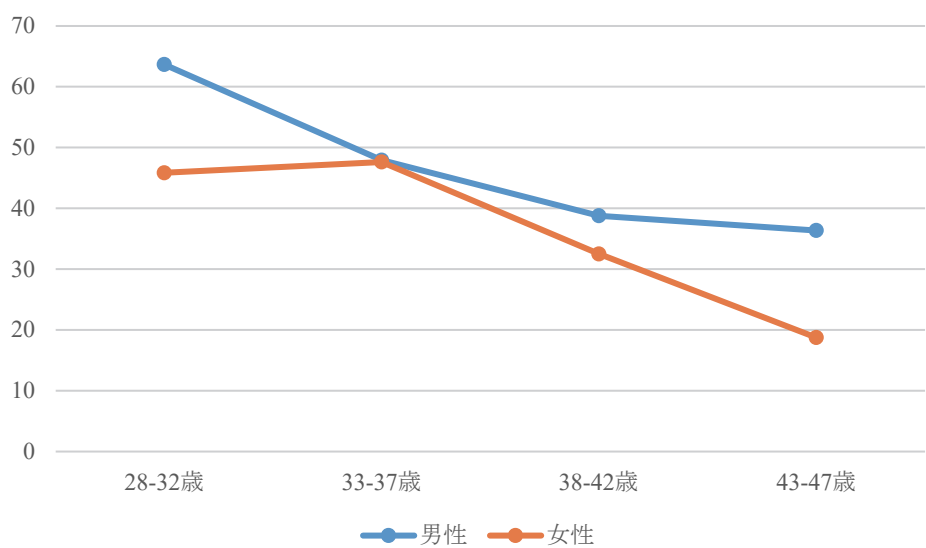


図 15 男女・年齢別の結婚希望

注 1：「絶対したい」＋「なるべくしたい」の合計比率

注 2：「現在、配偶者がいる」を集計から除外した。

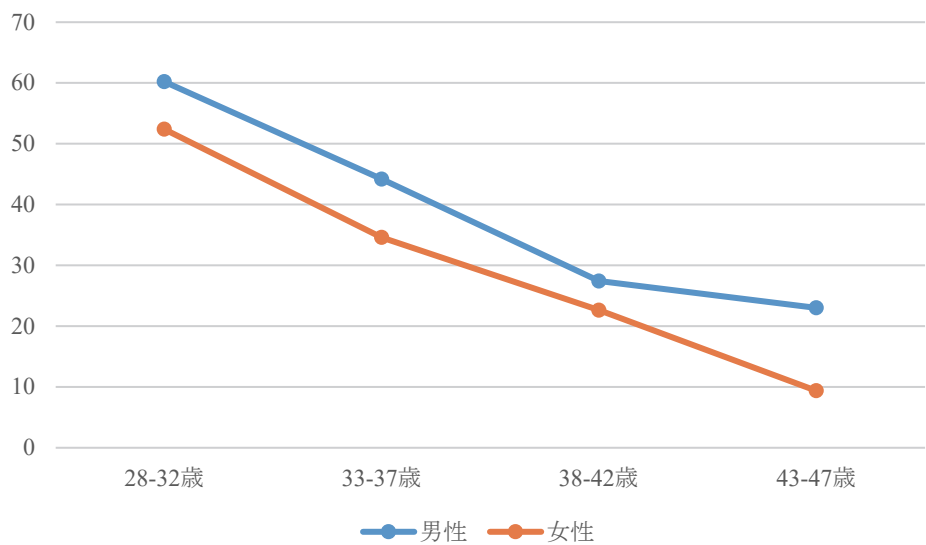


図 16 男女・年齢別の子ども希望

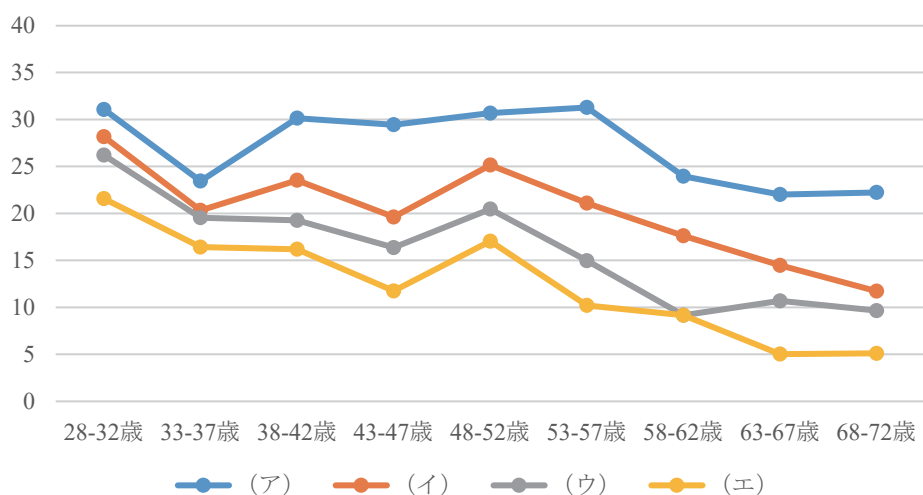
注：「絶対ほしい」＋「ほしい」の合計比率

(9) 結婚・出産への圧力

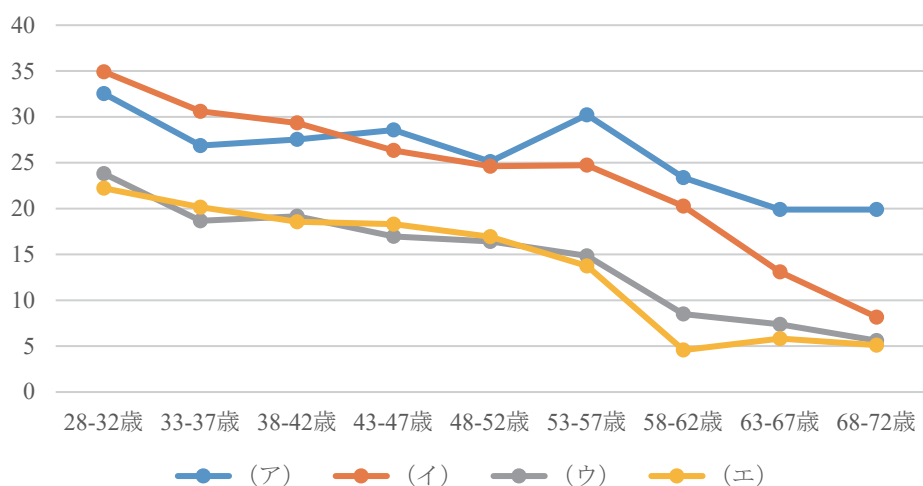
問 23 あなたが若いころに（あるいは現在）、周囲から次のようなことを促されていると感じることは、どの程度ありましたか。

- (ア) 親や親族から、早く結婚するよう促されていると感じること
- (イ) 親や親族から、早く子どもをもつよう促されていると感じること
- (ウ) 親族以外（仕事関係の人や友人）から、早く結婚するよう促されていると感じること
- (エ) 親族以外（仕事関係の人や友人）から、早く子どもをもつよう促されていると感じること

選択肢：「強く感じた」「ある程度感じた」「あまり感じなかった」「まったく感じなかった」



(a) 年齢別の結婚・出産への圧力（男性）



(b) 年齢別の結婚・出産への圧力（男性）

図 17 男女・年齢別の結婚・出産への圧力（4項目）

注：「強く感じた」＋「ある程度感じた」の合計比率

3 子どもとの関係

問 24～27 の子どもに関する設問については、3 人までの子どもについてその属性や関係を尋ねている。ここでは、第一子に絞り、その関係を集計した。なお、ここでは本人年齢ごとの分布を示しているが、子どもの年齢に大きく左右される結果である点に注意したい。

(1) 子どもとの関わり

問 26 上記の 1 番上のお子さんから 3 番目のお子さんについて、それぞれお答えください。

(イ) ふだん、この方と一緒に遊ぶこと（趣味、スポーツ、ゲームなど）は、どのくらいありますか。【若年】

1 ほぼ毎日（週 5～7 回）、2 週に 3～4 回、3 週に 1～2 回

(ウ) ふだん、この方に知識や技能（勉強や料理など）を教えることはありますか。【若年】

1 ほぼ毎日（週 5～7 回）、2 週に 3～4 回、3 週に 1～2 回、
4 月に 1～2 回、5 年に数回、6 まったくない

(エ) このお子さんの子育てに際して、あなたや配偶者が育児休業を取得することはありましたか。【若年・壮年】

1 あなた自身が取得した、2 配偶者が取得した、3 二人とも取得した、
4 いずれも取得していない

(オ) このお子さんが赤ん坊のころ、あなた自身が日常的に行っていた世話をすべて選んでください。【若年・壮年】

1 うんちのおむつ替え、2 離乳食を与えること、3 お風呂に入れること、
4 自分だけで一日世話をすること、5 いずれもしていなかった

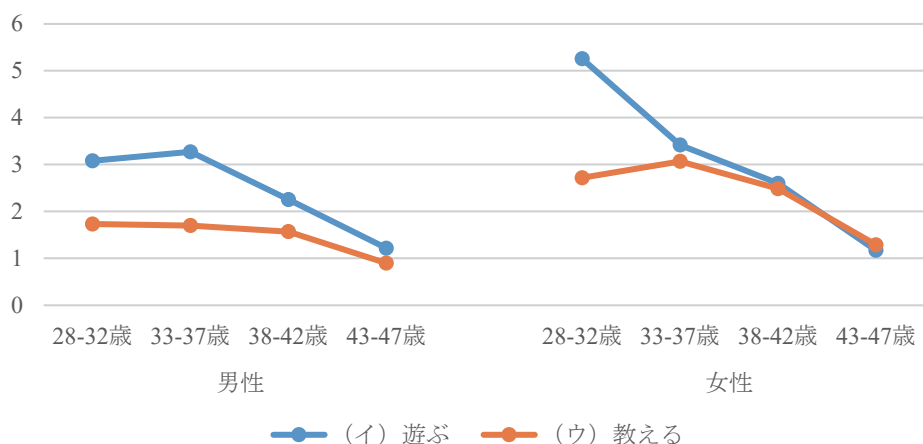


図 18 男女・年齢別の子どもと関わる頻度の平均値（第一子）

注：ほぼ毎日=6、1 週間に 3～4 回=3.5、1 週間に 1～2 回=1.5、月に 1～2 回=0.75、年に数回=0.05、まったくいない=0、と数値化した。

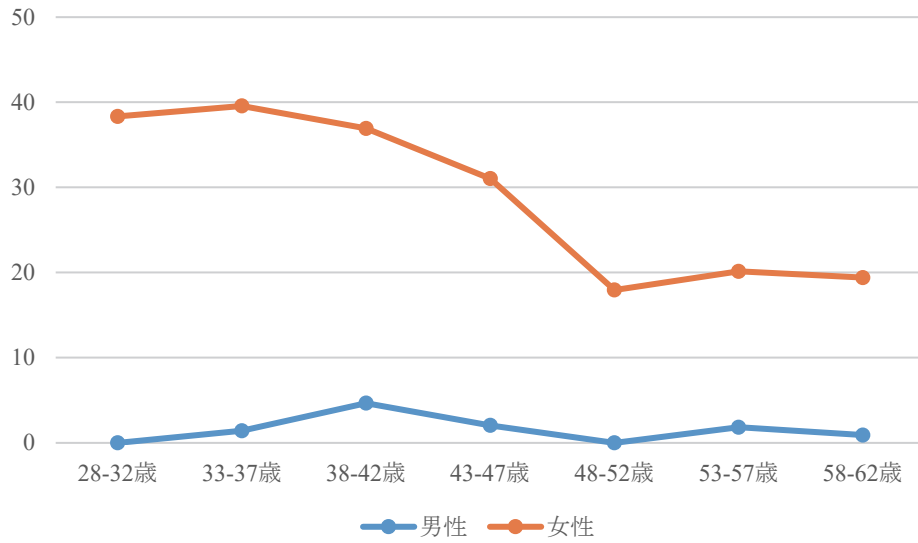
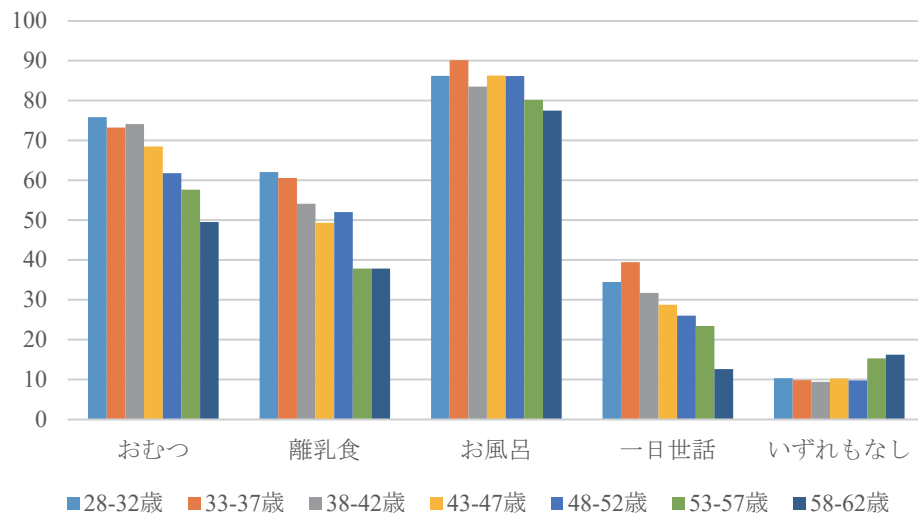
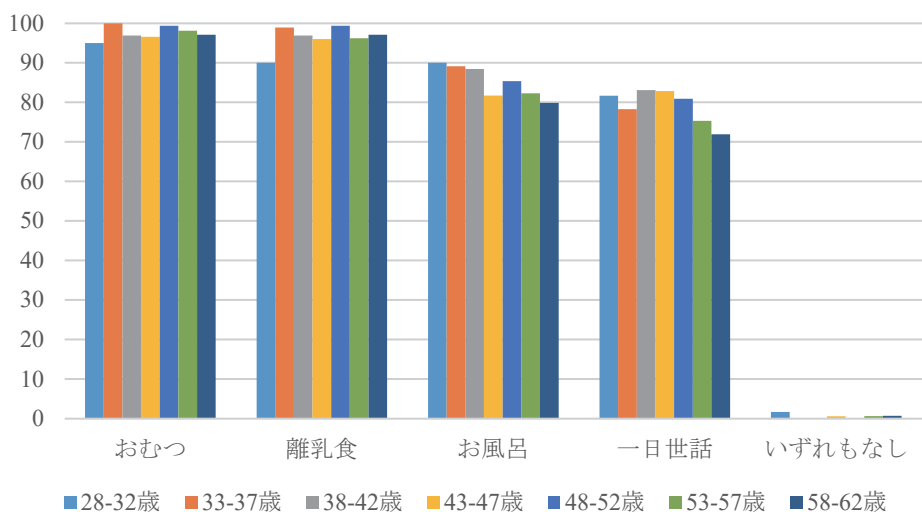


図 19 男女・年齢別の育児休業取得率（第一子）

注：「あなた自身が取得した」比率



(a) 年齢別の育児経験率：多重回答（男性）



(b) 年齢別の育児経験率：多重回答（女性）

図 20 男女・年齢別の育児経験：多重回答（第一子）

問 27 以下の質問には、18 歳以上のお子さんについてのみお答えください。
 (カ) この 1 年間に、この方と「話らしい話」をどのくらいしましたか。電話なども含めます。
 【壮年・高年】
 1 ほぼ毎日（週 5～7 回）、2 週に 3～4 回、3 週に 1～2 回
 4 月に 1～2 回、5 年に数回、6 まったくない

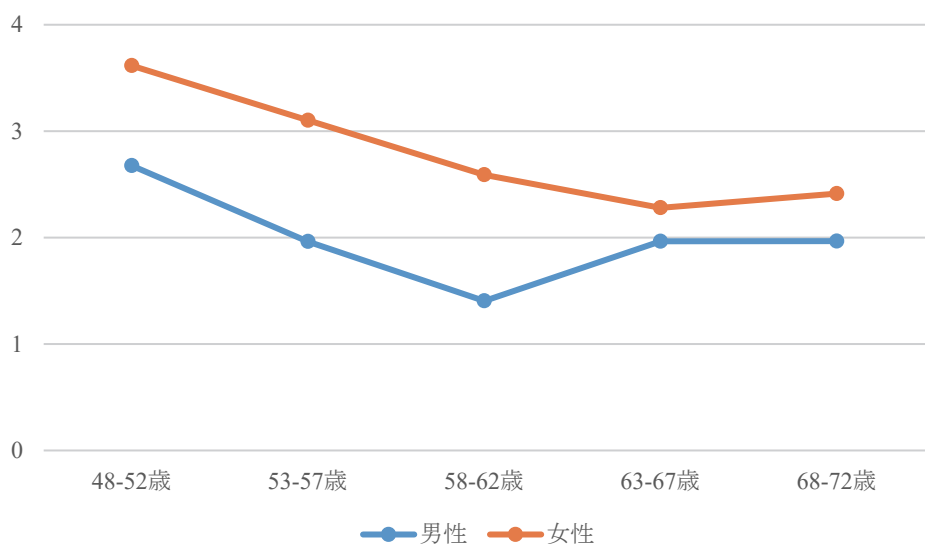


図 21 男女・年齢別の子との「話らしい話」頻度の平均値（第一子）

注：ほぼ毎日=6、1 週間に 3～4 回=3.5、1 週間に 1～2 回=1.5、月に 1～2 回=0.75、年に数回=0.05、まったくくない=0、と数値化した。

(2) 子どもとの援助の授受【壮年・高年】

- (キ) この1年間に、この方から金銭的な援助（小遣い、仕送り、贈与など）を受けましたか。
- (ク) この1年間に、この方に相談にのってもらうことはありましたか。
- (ケ) この1年間に、この方に看病や家事などの手伝いをしてもらうことはありましたか。
- (コ) この1年間に、この方に金銭的な援助（小遣い、仕送り、贈与など）をしましたか。
- (サ) この1年間に、この方の相談相手になることはありましたか。
- (シ) この1年間に、この方の看病や家事・育児などの手伝いをしたことはありましたか。

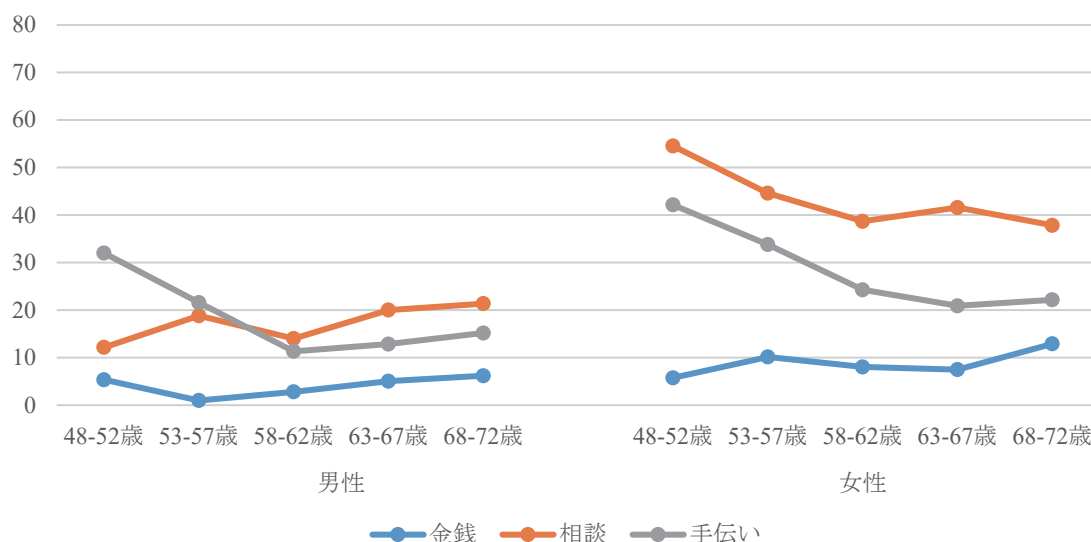


図 22 男女・年齢別の 18 以上の子どもからの援助（第一子）

注：(キ) (ク) (ケ) を金銭、相談、手伝いと表記した。

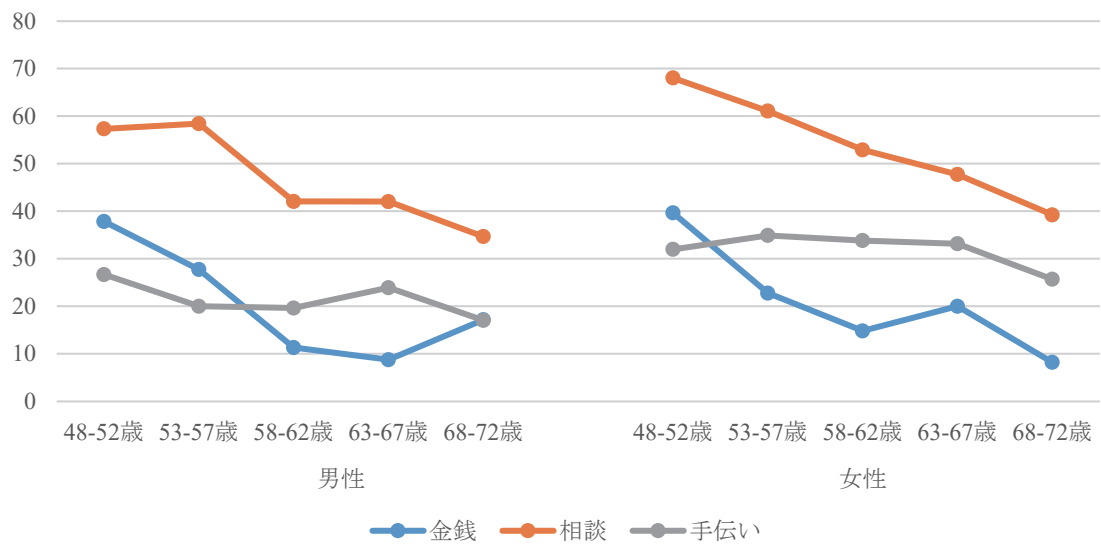


図 23 男女・年齢別の 18 以上の子どもへの援助（第一子）

注：(コ) (サ) (シ) を金銭、相談、手伝いと表記した。

(3) 子どもとの関係良好度

(ス) この方との関係は、いかがですか。

1 良好、2 どちらかといえば良好、3 どちらかといえば悪い、4 悪い

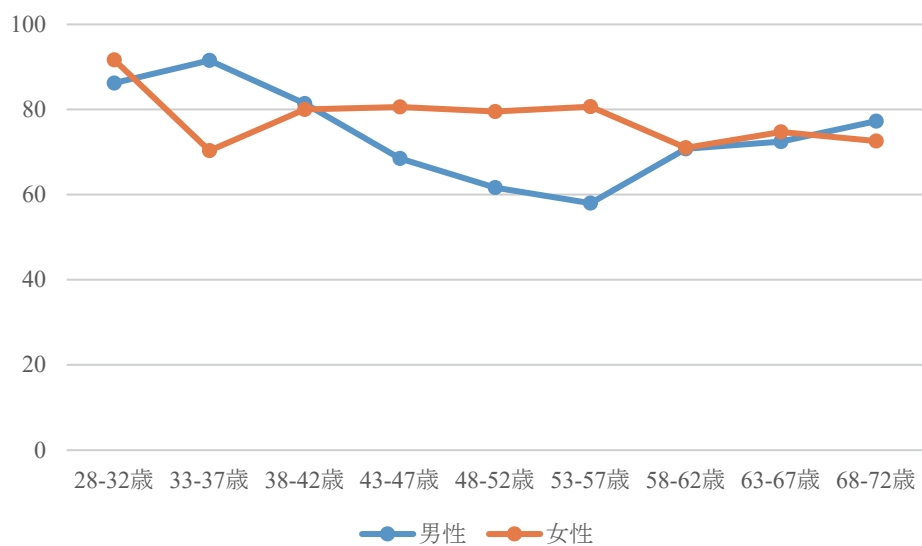


図 24 性・年齢別の子どもとの関係良好度（第一子）

注：「良好」の比率

(4) 子育て負担【若年】

問 29 子育てについて、あなたがこの1年間に次のような負担を感じることは、どの程度ありましたか。

- (ア) 身の回りの世話をする負担が大きすぎる
- (イ) しつけや家庭教育の負担が大きすぎる
- (ウ) 教育費などの経済的な負担が大きすぎる

選択肢：「強く感じた」「ある程度感じた」「あまり感じなかった」「ほとんど感じなかった」

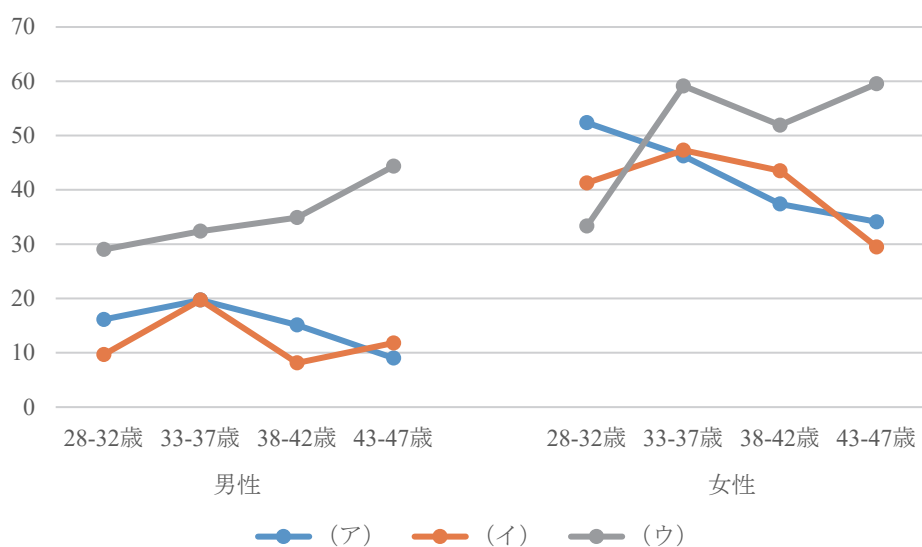


図 25 男女・年齢別の子育て負担感 (3項目)

注：「強く感じた」＋「ある程度感じた」の合計比率

(5) 子育て参考情報【若年】

問 30 この1年間で、子どもに関する悩み（育て方、病気、思春期、勉強、進路、結婚など）について、次のような方の意見を参考にすることは、どの程度ありましたか。

- (ア) 配偶者
- (イ) 自分の親やその親族
- (ウ) 配偶者の親やその親族
- (エ) 子どもの友達の保護者
- (オ) 専門家（学校や塾の先生、保育士、医師など）
- (カ) 友人や職場の同僚
- (キ) インターネット上の相談

選択肢：「よく参考にする」「ある程度参考にする」「あまり参考にしない」「ほとんど／まったく参考にしない」

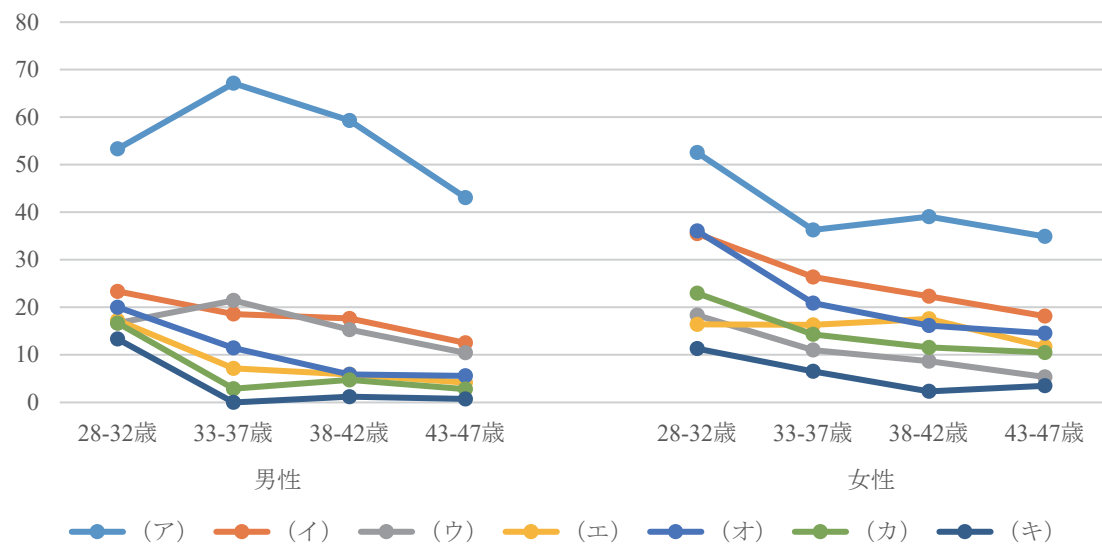


図 26 男女・年齢別の子育て参考情報源の分布 (6 項目)

注: 「よく参考にする」 + 「ある程度参考にする」の合計比率

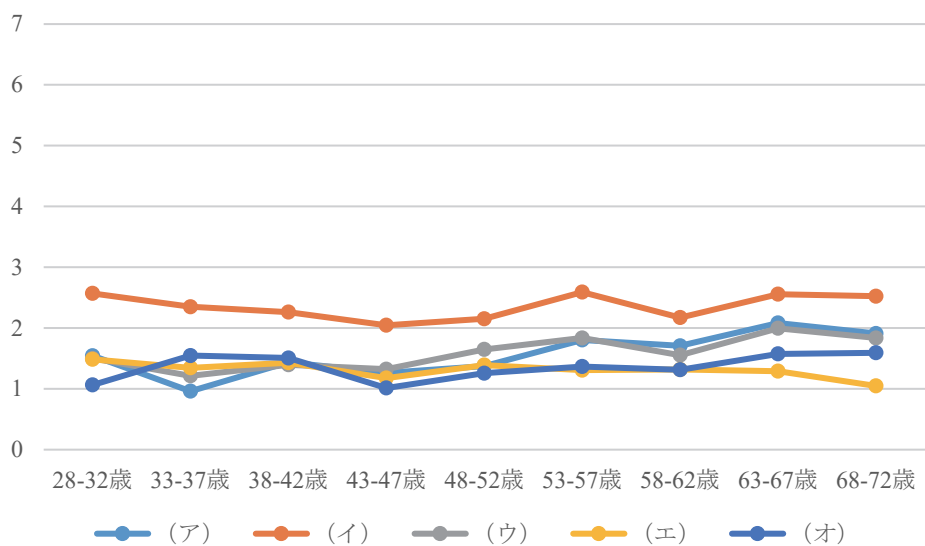
4 家事頻度・生活意識

(1) 家事・子育て頻度

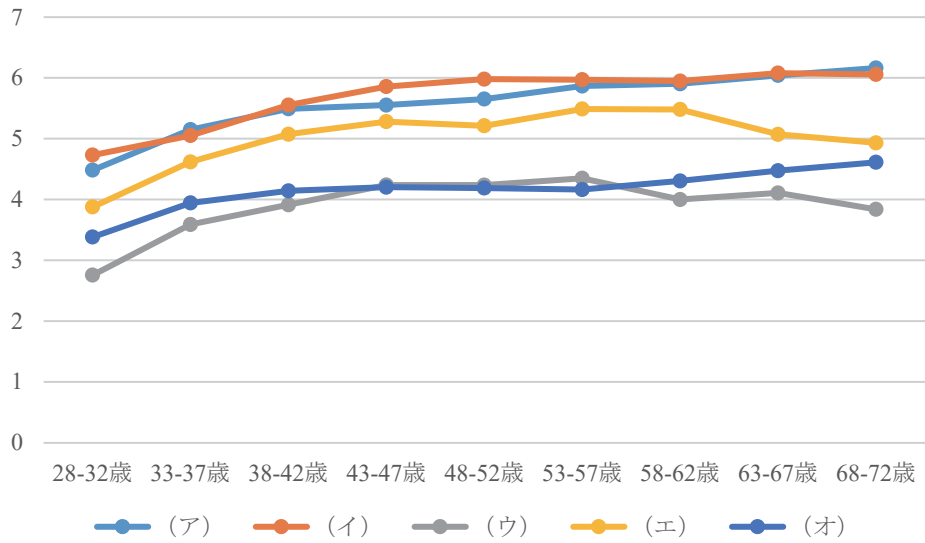
問31 次にあげる（ア）～（キ）の家事を現在どのくらいの頻度で行っていますか。

- （ア） 食事の用意
- （イ） 食事のあとかたづけ
- （ウ） 食料品や日用品の買い物
- （エ） 洗濯
- （オ） そうじ（部屋、風呂、トイレなど）
- （カ） 子どもと遊ぶこと 【若年】
- （キ） 子どもの身の回りの世話 【若年】

選択肢：「ほぼ毎日（週6～7日）」「1週間に4～5回」「1週間に2～3回」「週に1回くらい」「ほとんど行わない」



(a) 年齢別の家事頻度の平均値（男性）



(b) 年齢別の家事頻度の平均値 (女性)

図 27 男女・年齢別の家事頻度 (5 項目) の平均値

注：ほぼ毎日=6.5、1週間に4～5回=4.5、1週間に2～3回=2.5、週に1回くらい=1、ほとんど行わない=0、と数値化した。

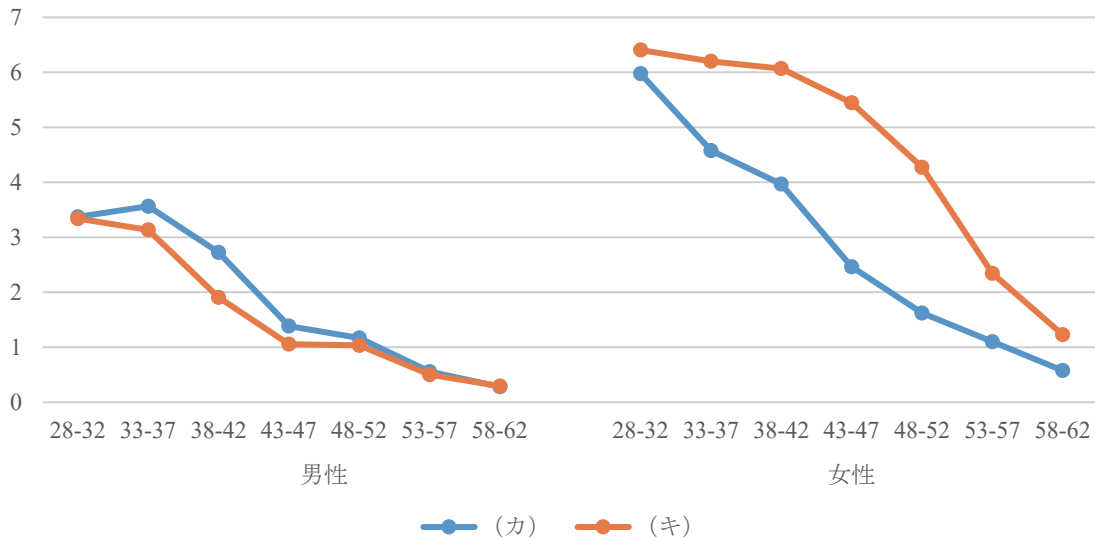


図 28 男女・年齢別の育児頻度 (2 項目) の平均値

注：ほぼ毎日=6.5、1週間に4～5回=4.5、1週間に2～3回=2.5、週に1回くらい=1、ほとんど行わない=0、と数値化した。

(2) 各種の生活意識

- 問 34 お宅の現在の家計の状態についてどのようにお考えですか。
 1 かなりゆとりがある 2 どちらかといえばゆとりがある
 3 どちらかといえば苦しい 4 かなり苦しい
- 問 35 あなたのこの1年間の健康状態は、おおむね、いかがでしたか。
 1 たいへん良好 2 まあ良好 3 どちらともいえない
 4 やや悪い 5 たいへん悪い
- 問 36 現在の生活全体にどのくらい満足されていますか。
 1 かなり満足 2 どちらかといえば満足
 3 どちらかといえば不満 4 かなり不満
- 問 37 生活面に関する以下の項目について、あなたはどのくらい満足していますか。
 (ア) 近隣の人々との関係
 (イ) 余暇の過ごし方
 (ウ) 現在の家計の状態
 (エ) 友人関係
 (オ) あなたの仕事（無職の場合は、仕事をしていない状態について）
 (カ) 家族関係全体
 選択肢：「かなり満足」「どちらかといえば満足」「どちらかといえば不満」「かなり不満」

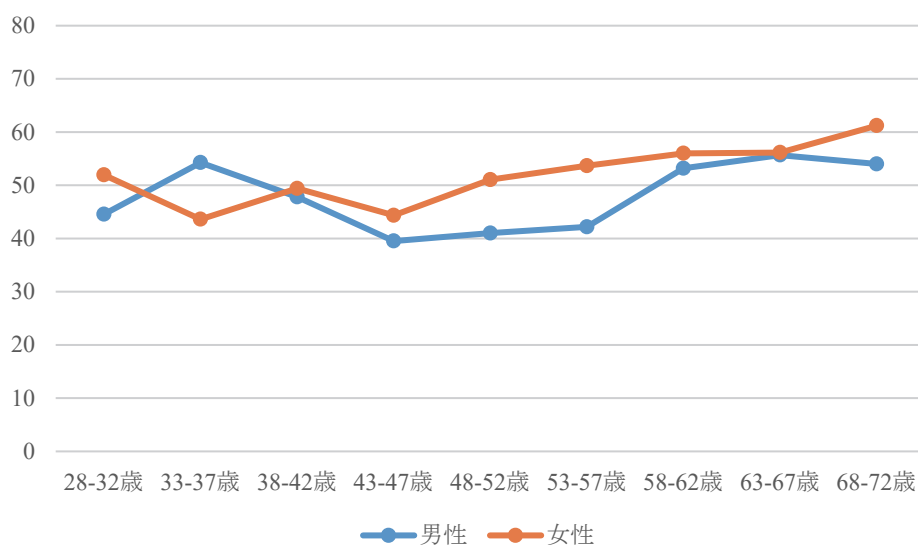


図 29 男女・年齢別の生活のゆとり

注：「かなりゆとりがある」＋「どちらかといえばゆとりがある」の合計

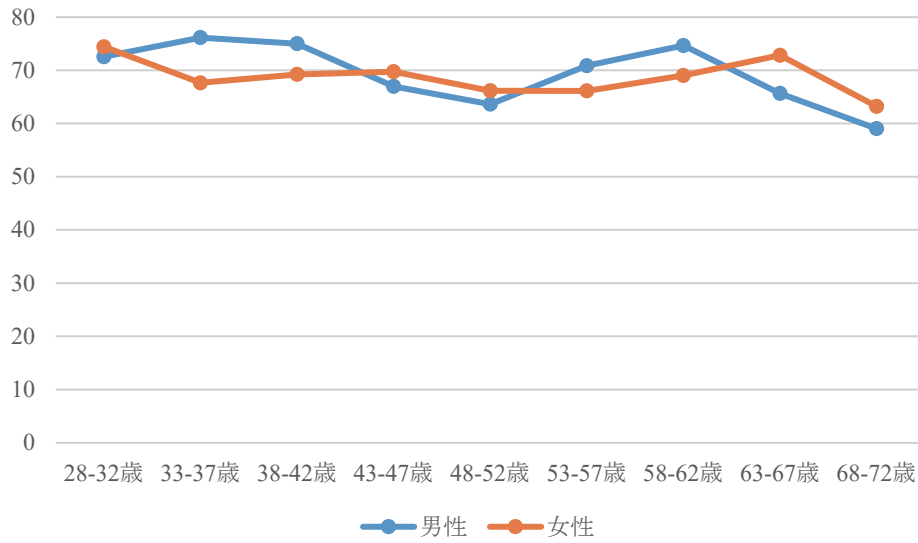


図 30 男女・年齢別の健康状態

注：「たいへん良好」＋「まあ良好」の合計比率

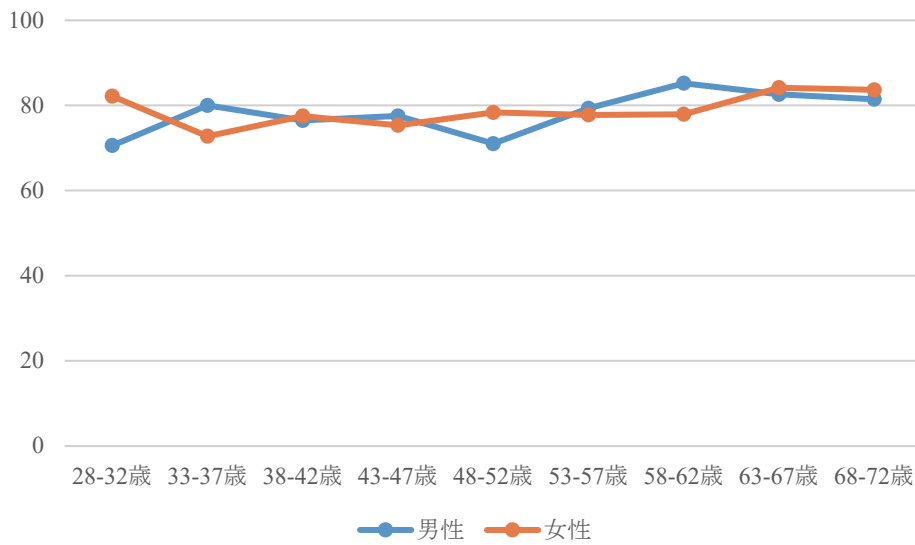
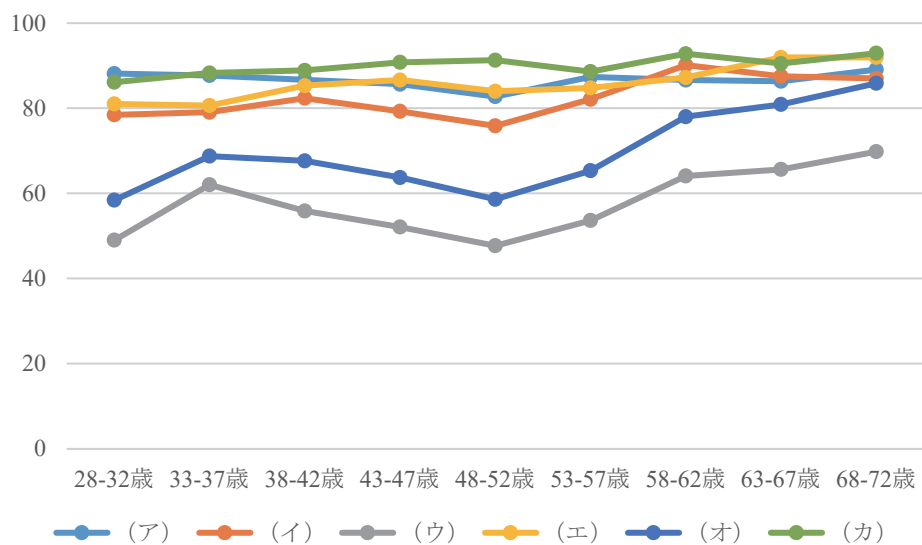
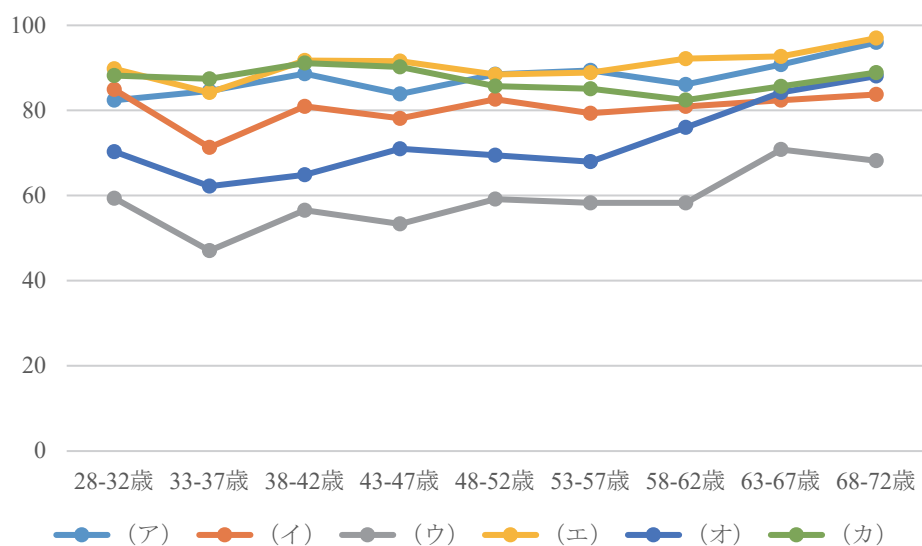


図 31 男女・年齢別の生活満足度

注：「かなり満足」＋「どちらかといえば満足」の合計



(a) 年齢別の領域別満足度 (男性)



(b) 年齢別の領域別満足度 (女性)

図 32 男女・年齢別の領域別満足度 (6項目)

注: 「かなり満足」 + 「どちらかといえば満足」の合計

(3) 介護経験

- 問 38 現在、あなたの家族には、長期にわたる心身の病気・障がいや高齢のために介護(ケア)が必要な方はいますか(別々に暮らしている方も含めます)。
- 問 39 そのなかで、現在、あなた自身が中心になって介護(ケア)されている方はいますか。
- 問 40 かつて、あなた自身が中心になって、家族のどなたかの介護(ケア)を3か月以上したことはありますか。現在も介護を続けている方は除いてください。

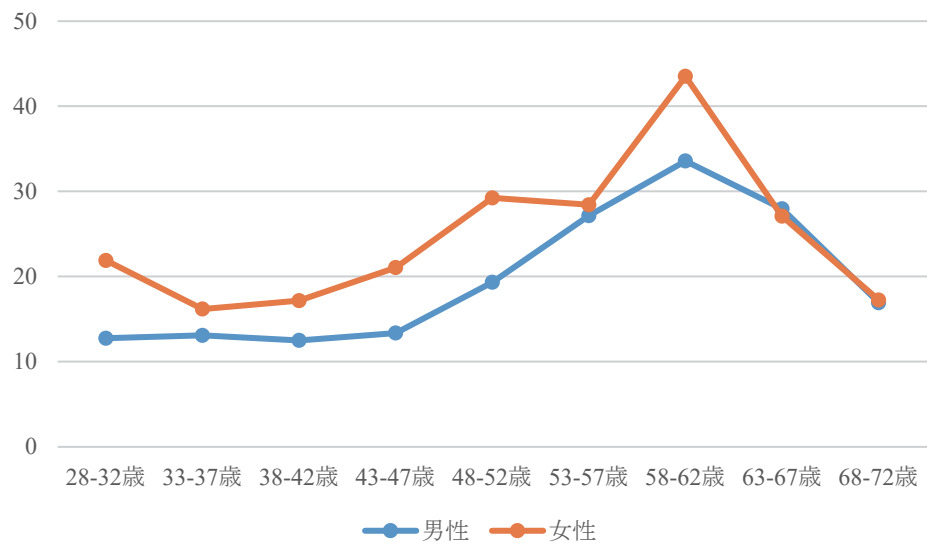


図 33 男女・年齢別の介護に必要な家族の有無

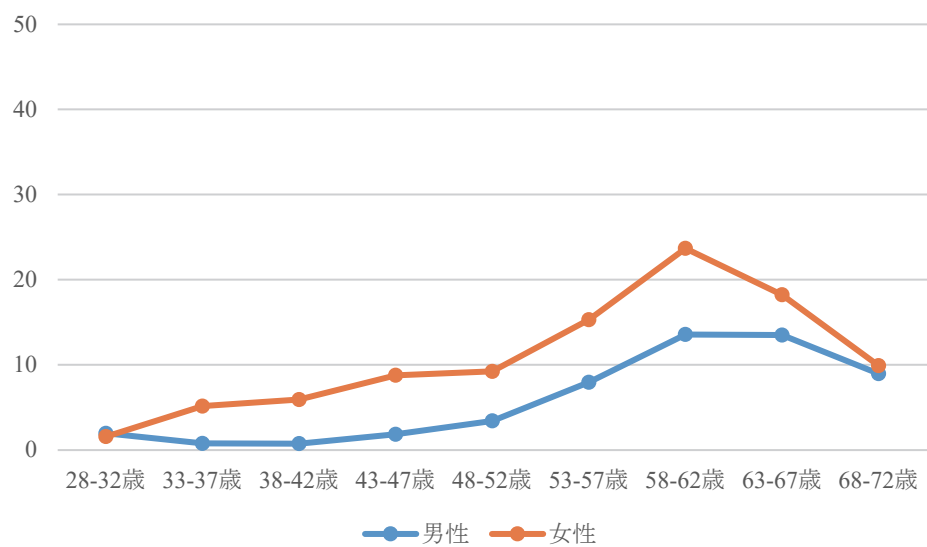


図 34 男女・年齢別の介護している比率

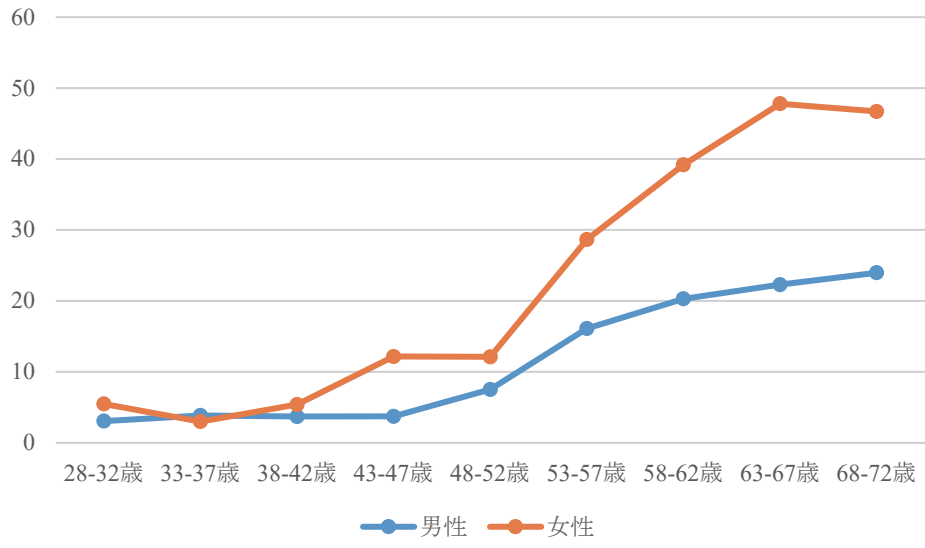


図 35 男女・年齢別の介護経験率

5 父母との関係

(1) 会話頻度

問 43 (カ) この1年間に、この方と「話らしい話」をどのくらいしましたか。電話なども含めます。

- 1 ほぼ毎日（週5～7回）、2 週に3～4回、3 週に1～2回
4 月に1～2回、5 年に数回、6 まったくない

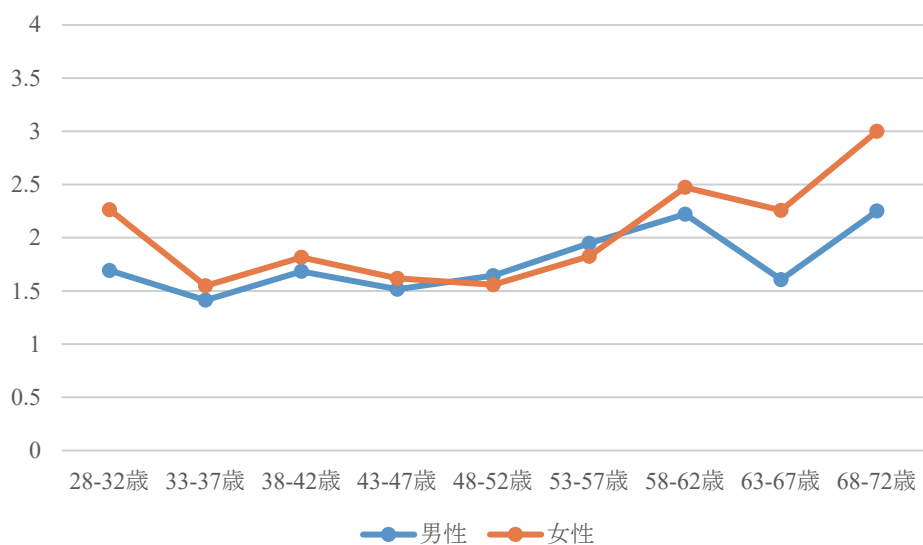


図 36 男女・年齢別の父との「話らしい話」頻度

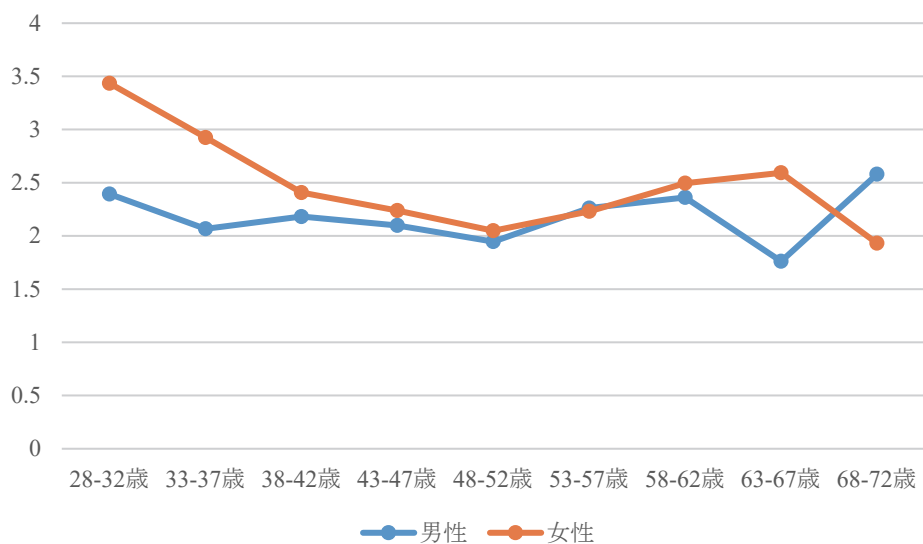


図 37 男女・年齢別の母との「話らしい話」頻度

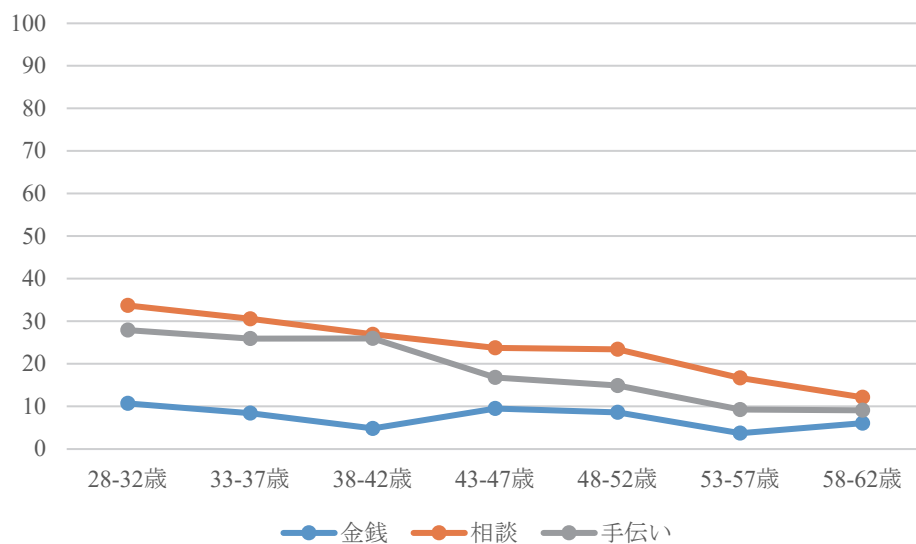
注：ほぼ毎日=6、1週間に3～4回=3.5、1週間に1～2回=1.5、月に1～2回=0.75、年に数回=0.05、まったくくない=0、と数値化した。

(2) 援助の授受

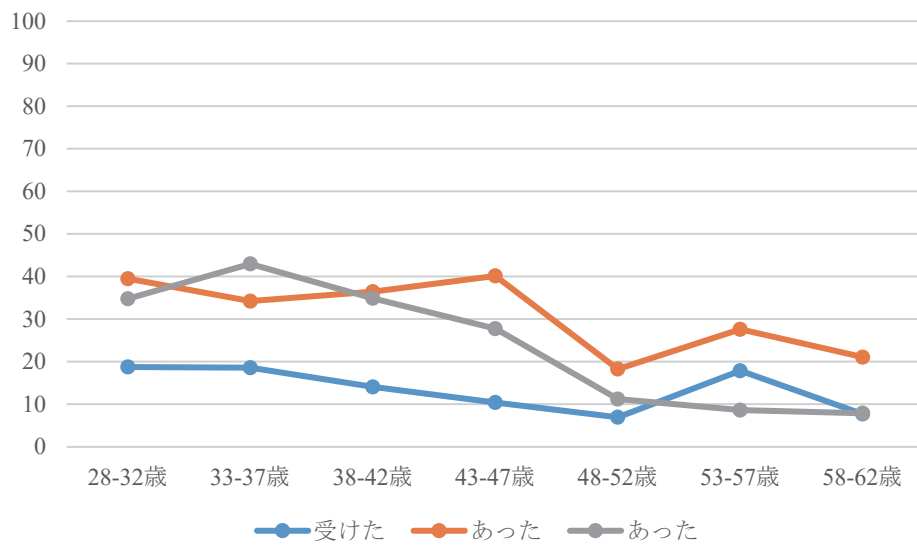
以下の(キ)～(シ)を父母のそれぞれについて尋ねている。

- (キ) この1年間に、この方から金銭的な援助（小遣い、仕送り、贈与など）を受けましたか。
- (ク) この1年間に、この方に相談にのってもらうことはありましたか。
- (ケ) この1年間に、この方に看病や家事などの手伝いをしてもらうことはありましたか。
- (コ) この1年間に、この方に金銭的な援助（小遣い、仕送り、贈与など）をしましたか。
- (サ) この1年間に、この方の相談相手になることはありましたか。
- (シ) この1年間に、この方の看病や家事・育児などの手伝いをしたことはありましたか。

i) 父母からの援助

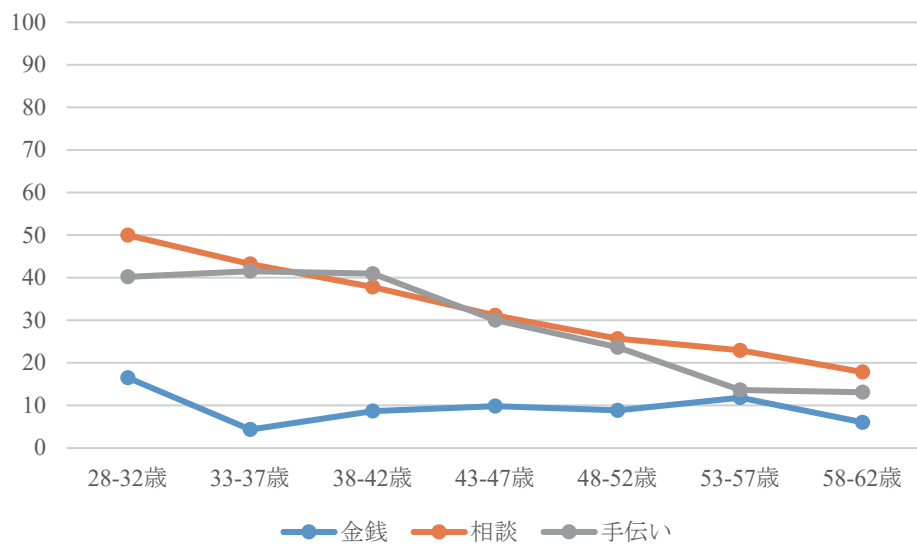


(a) 年齢別の父からの援助（男性）

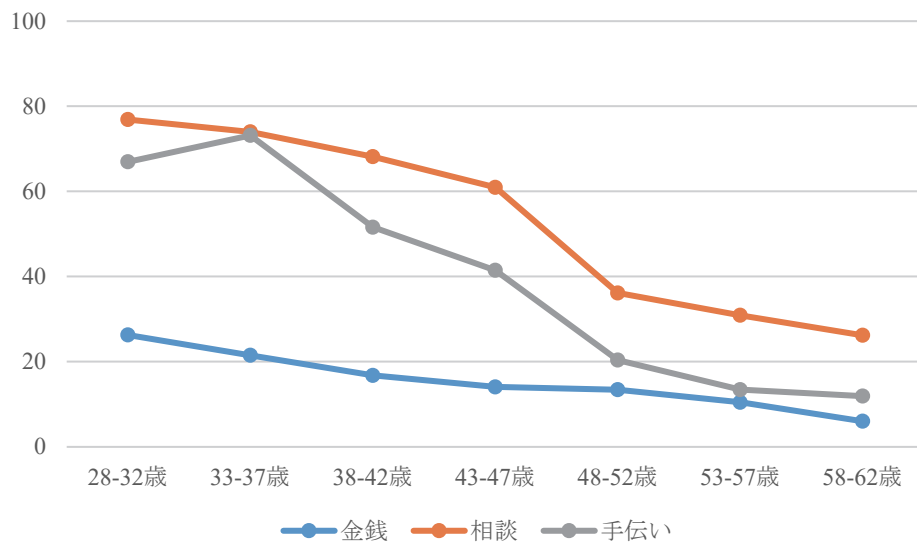


(b) 年齢別の父からの援助（女性）

図 38 男女・年齢別の父からの援助

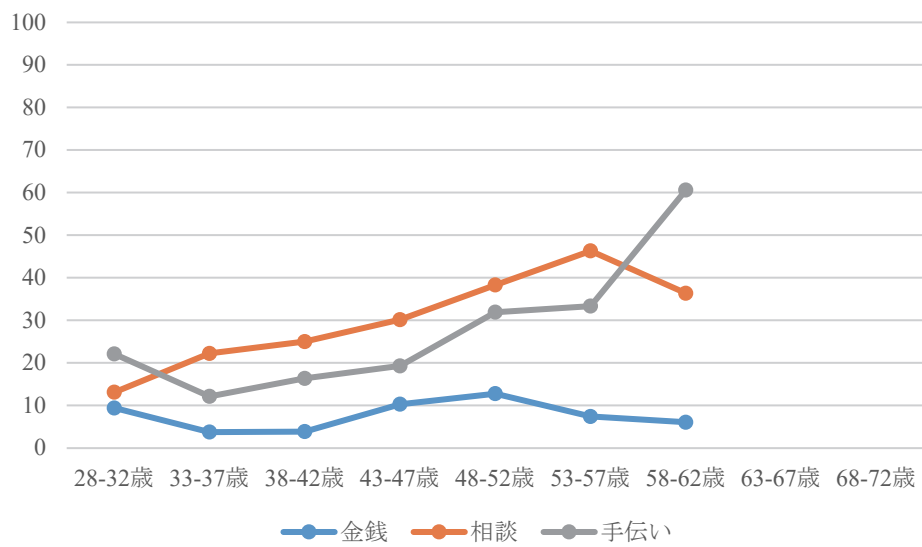


(a) 年齢別の母からの援助（男性）

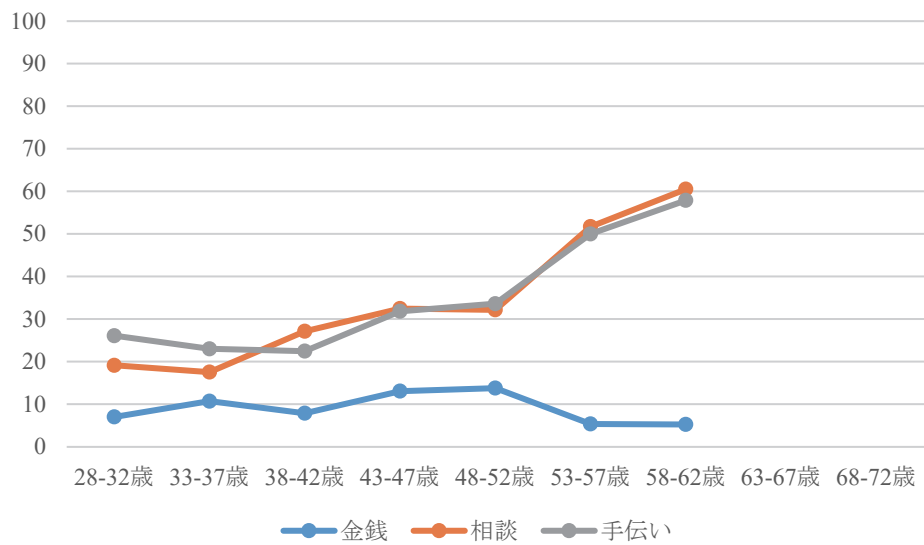


(b) 年齢別の母からの援助（女性）
 図 39 男女・年齢別の母からの援助

ii) 父母への援助



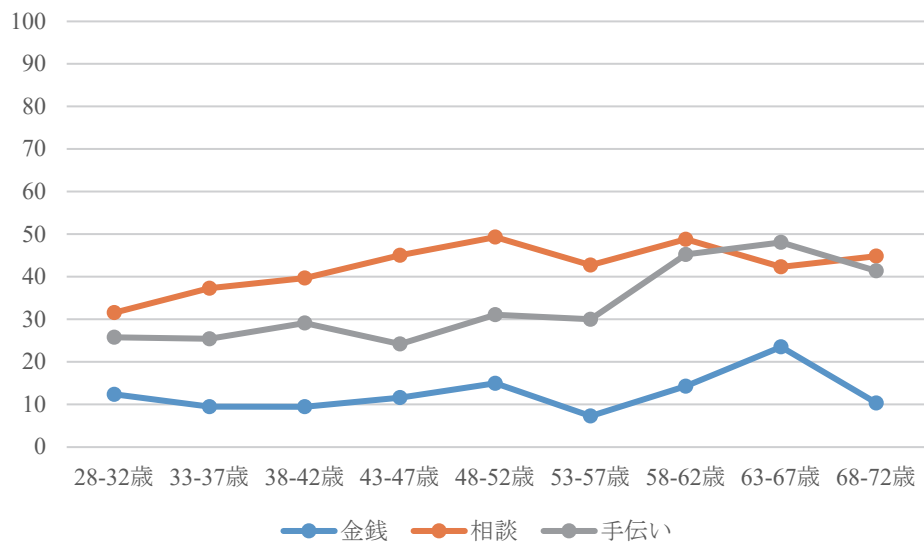
(a) 年齢別の父への援助（男性）



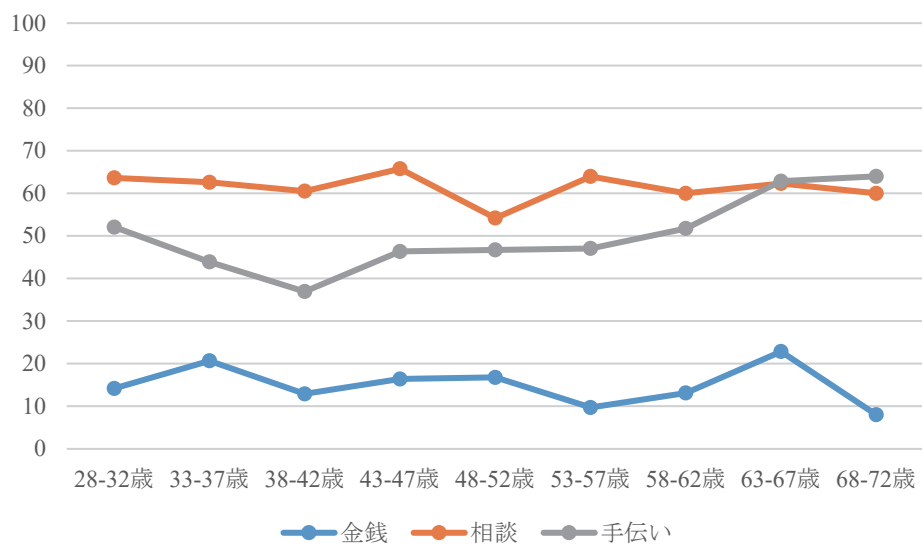
(b) 年齢別の父への援助 (女性)

図 40 男女・年齢別の父への援助

注：63-67歳、68-72歳は男女とも20名に満たないため表示を省略した



(a) 年齢別の母への援助 (男性)



(b) 年齢別の母への援助 (女性)

図 41 男女・年齢別の母への援助

(3) 父母との関係良好度

(ス) この方との関係は、いかがですか。

1 良好、2 どちらかといえば良好、3 どちらかといえば悪い、4 悪い

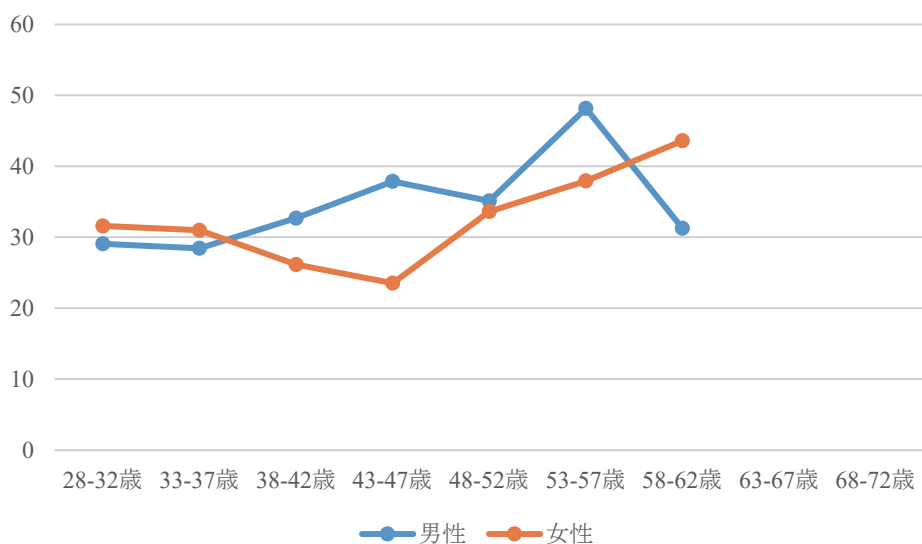


図 42 男女・年齢別の父との関係良好度

注 1 : 「良好」の比率

注 2 : 63-67 歳、68-72 歳は男女とも 20 名に満たないため表示を省略した

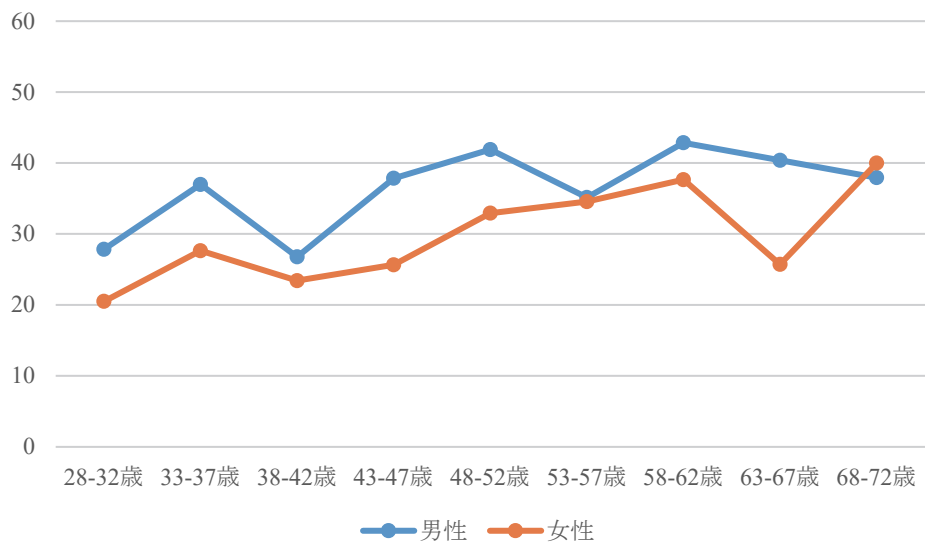


図 43 男女・年齢別の母との関係良好度

注：「良好」の比率

(吉田崇)

執筆分担者

I 調査のねらいとデザイン

- 1 第4回全国家族調査（NFRJ18）の概要（田淵六郎）
- 2 調査票の構造（保田時男・田中慶子）
- 3 サンプルングとデータの基本特性（保田時男・田中慶子）
- 4 データクリーニングの概況（保田時男）

II 調査結果の概要（吉田崇）

第4回 家族についての全国調査（NFRJ18）

第一次報告書

2023年8月発行

発行：日本家族社会学会・全国家族調査（NFRJ）委員会